COMICS & NOVELS!!

FANTASY LAND

ファンタジーランド

コミックと小説の新コーナー、絶好調です!!

RPGやAVGのようにハラハラドキドキ
コンピュータ・ゲームよりも面白いコミック
スや小説が読みたいっ!!そんな欲ばりなあ
なたのためのコーナーです!!

CONTENTS

ウィザードリィ外伝 第2部
鳳凰の塔 3
作/石垣環

〈コラム〉スーパーブックガイド
この本を読め!! 28
柴尾豊太郎

DRAGON LORE ドラゴンロアー
最後の竜に捧げる歌Ⅱ 29
作/外薗昌也
原作/手塚一郎

スーパーギャグコミック
品川KIDの **死んでしまうとは何事じゃ** 45
作/品川KID

小説ウィザードリィⅡ
風よ。龍に届いているか 49
作/ベニー松山
イラスト/高橋政輝

FANTASY LAND

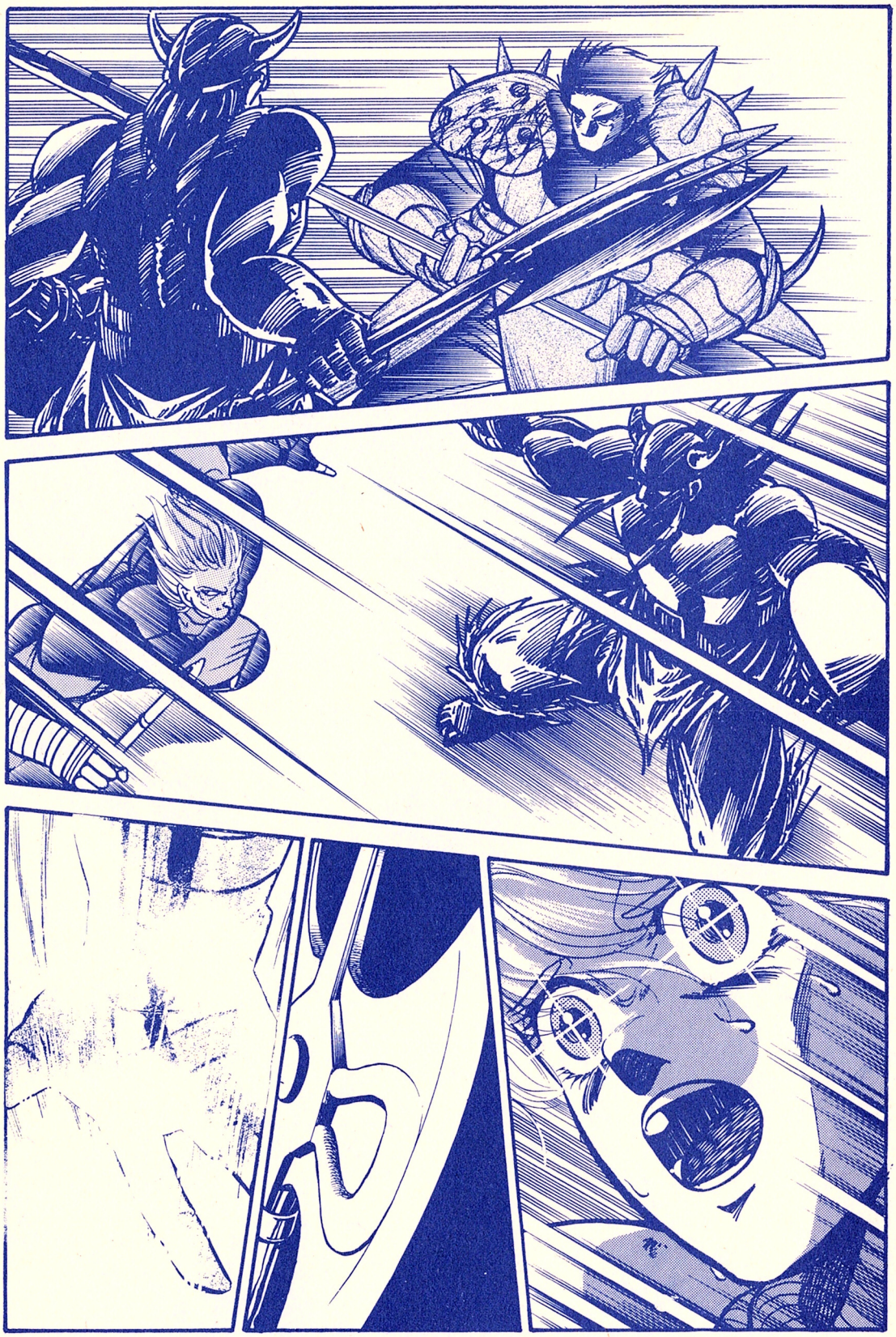
Wizardry®

ウィザードリィ外伝 第2部

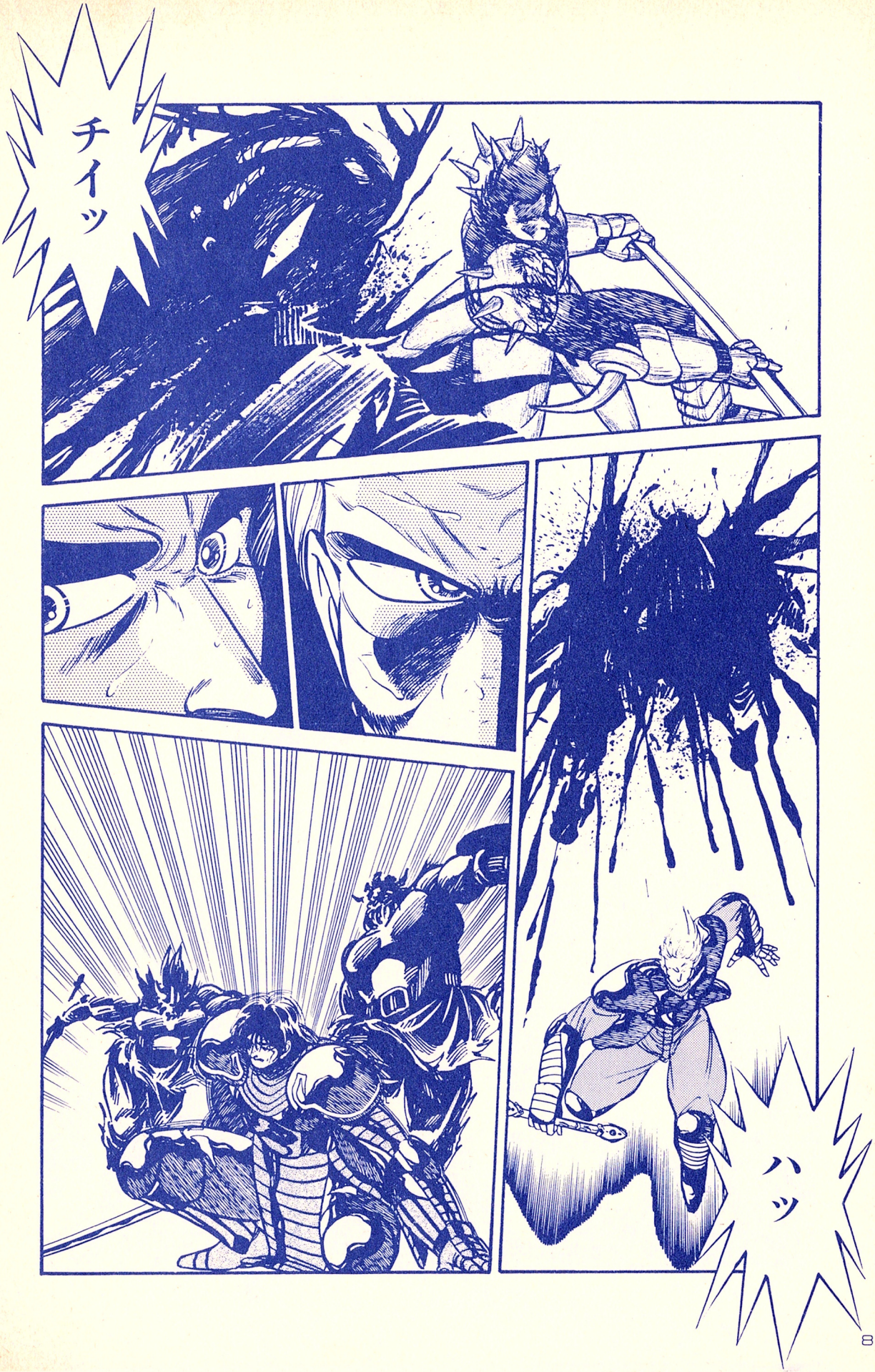
鳳凰の塔

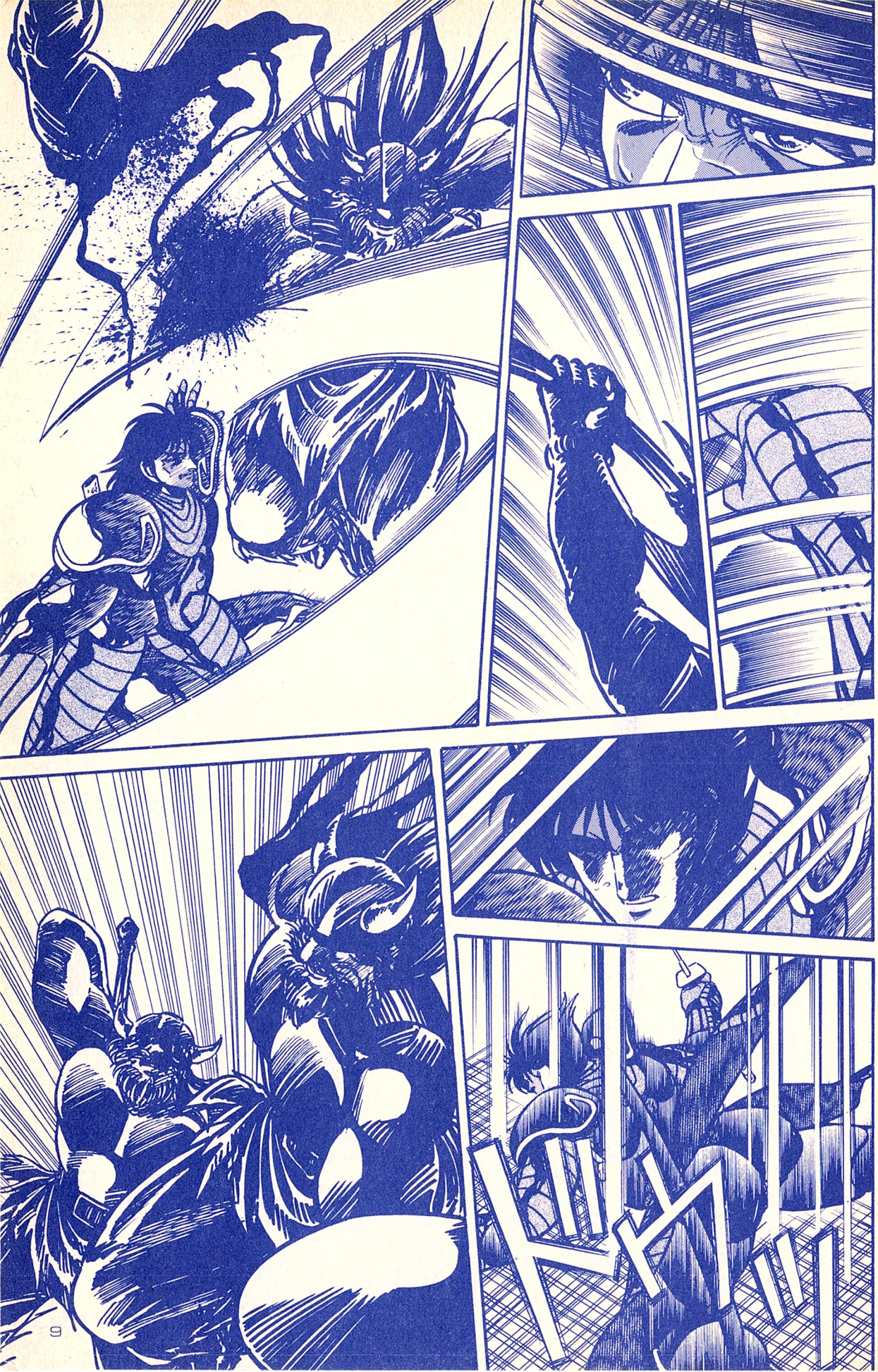
第8話「苦闘」

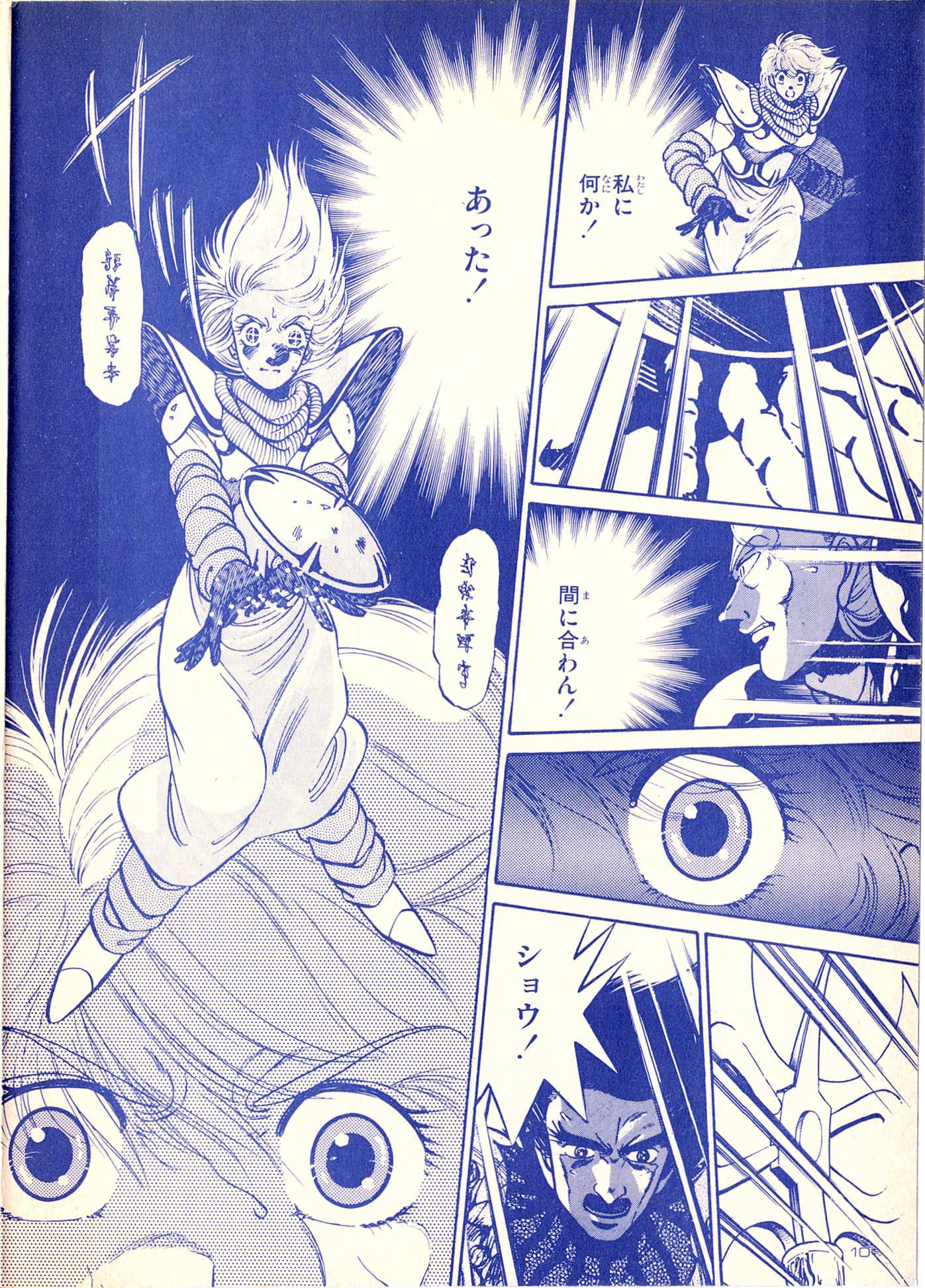
作/石垣環



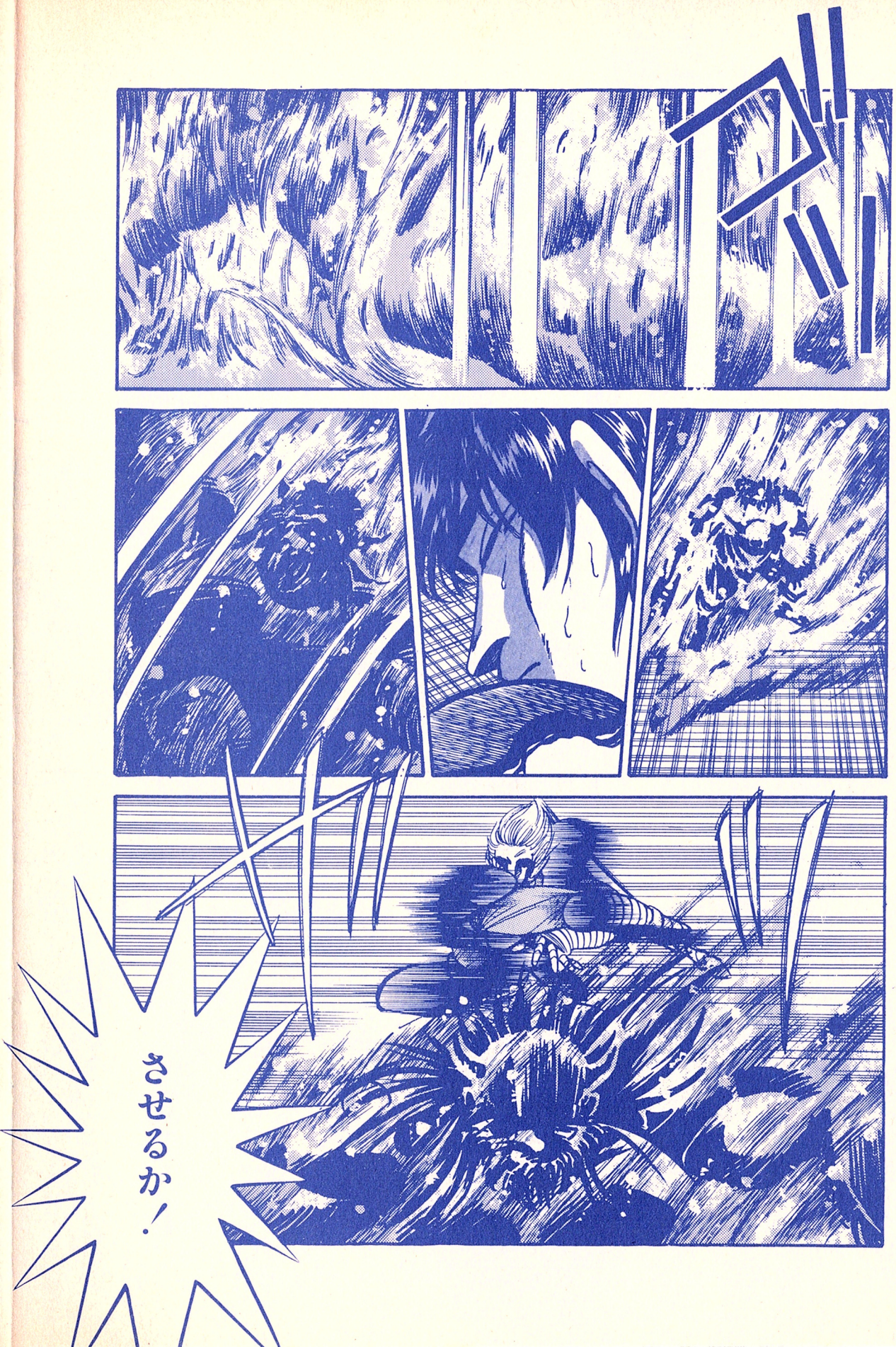
大凍（マダルト）！

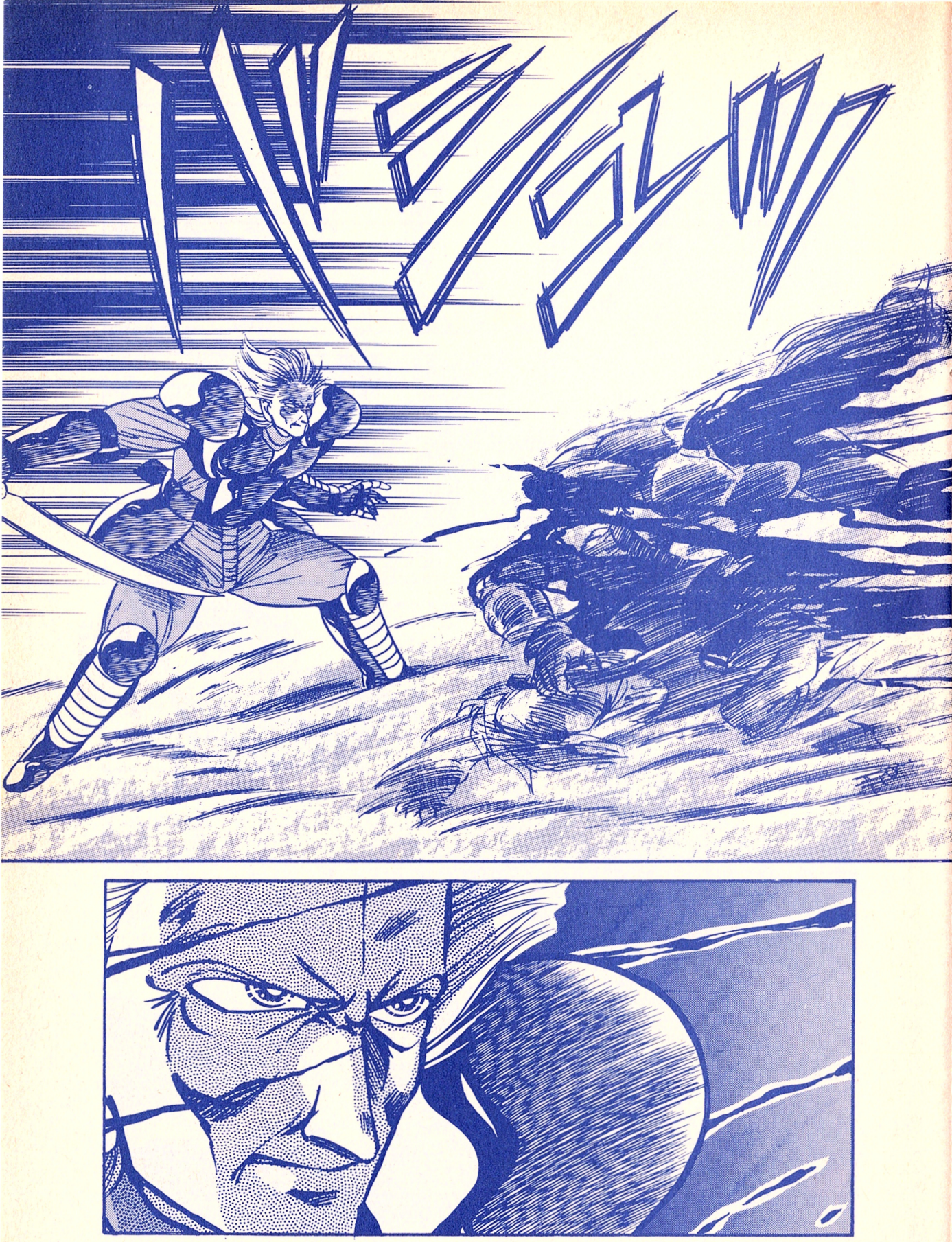

チイッ
ハッ




私に何か！
ショウ！
間に合わん！
あった！

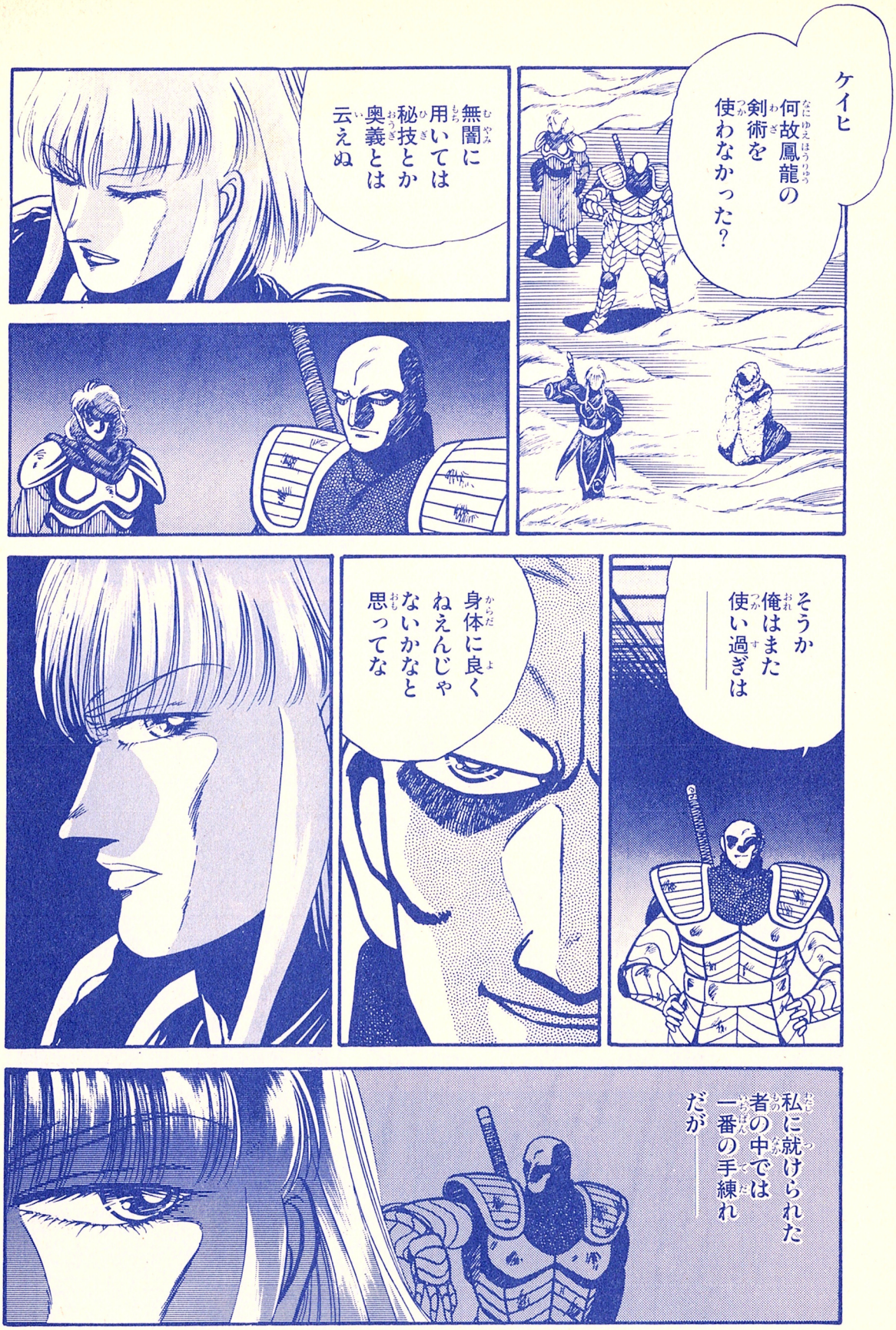
行け！
何！
塔炎！

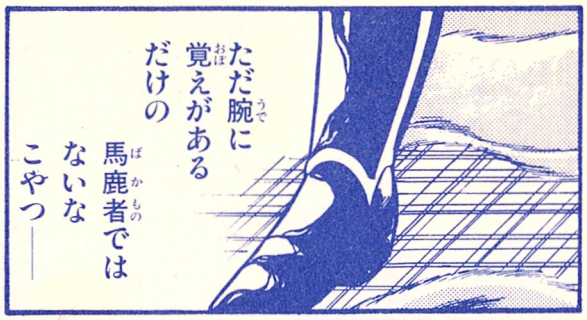

させるか！

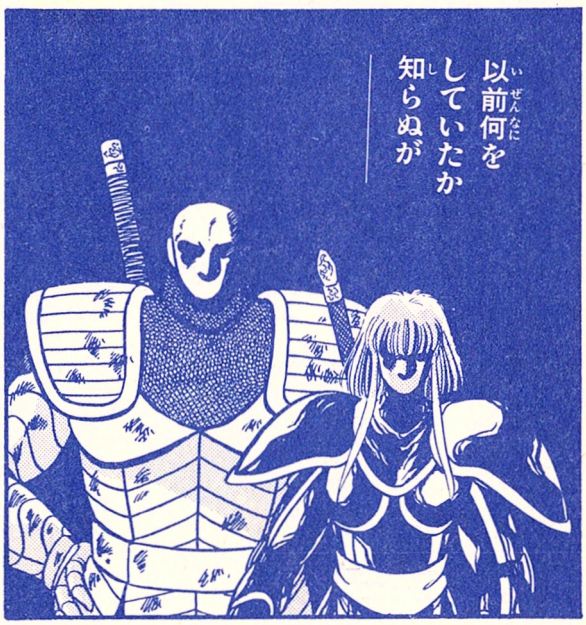

ハヒシュン

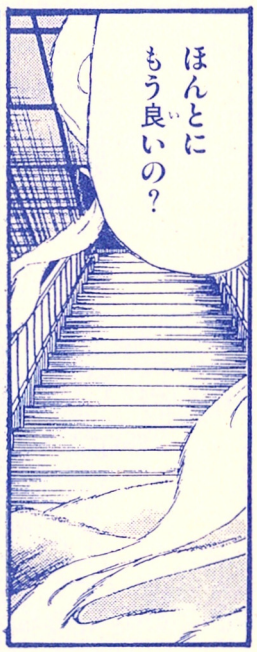
ショウ！
ショウ！
ズーン
以前「虚空斬」を使った時も確か——
自分の身体で確かめて
まさか鳳龍の剣術の秘密とは——

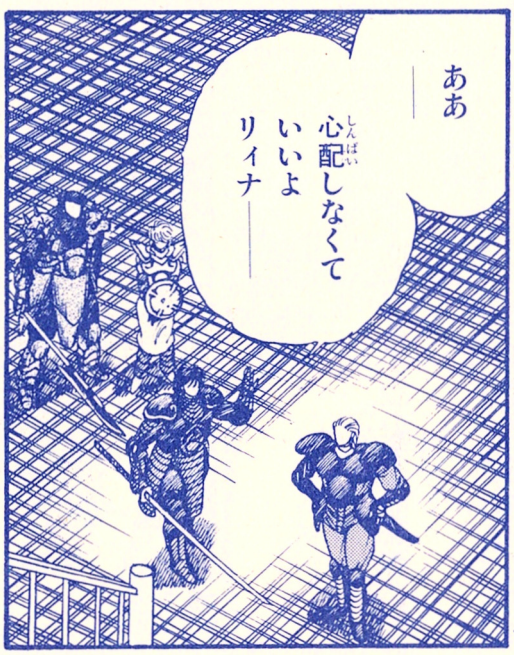
ショウは？
大丈夫だ
眠っているだけだ
う、うん
眠ってる!?
ああ
そのまま
少しの間
眠らせて
やってくれ
「己の生命すら
燃やし尽す」
と云う風聞は
強ち誤りでは
ないようだな
違っていたのは
全ての侍が
使える訳では
なく
ごく一部の
者しか
使えぬ
剣法だと
云うことか

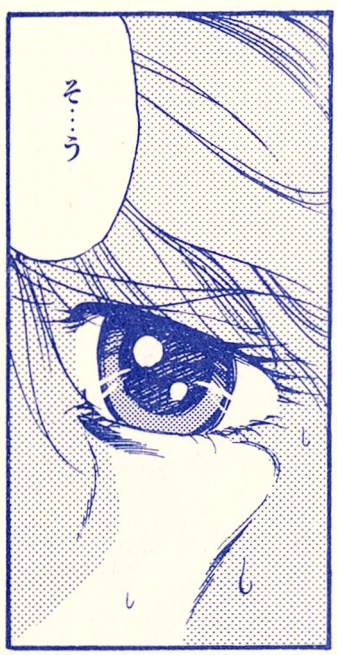

ケイヒ
何故鳳龍の剣術を使わなかった？
無闇に用いては秘技とか奥義とは云えぬ
そうか俺はまた使い過ぎは――
身体に良くねえんじゃないかなと思ってな
私に就けられた者の中では一番の手練れだが――


ただ腕に
覚えがある
だけの
馬鹿者では
ないな
こやつ——

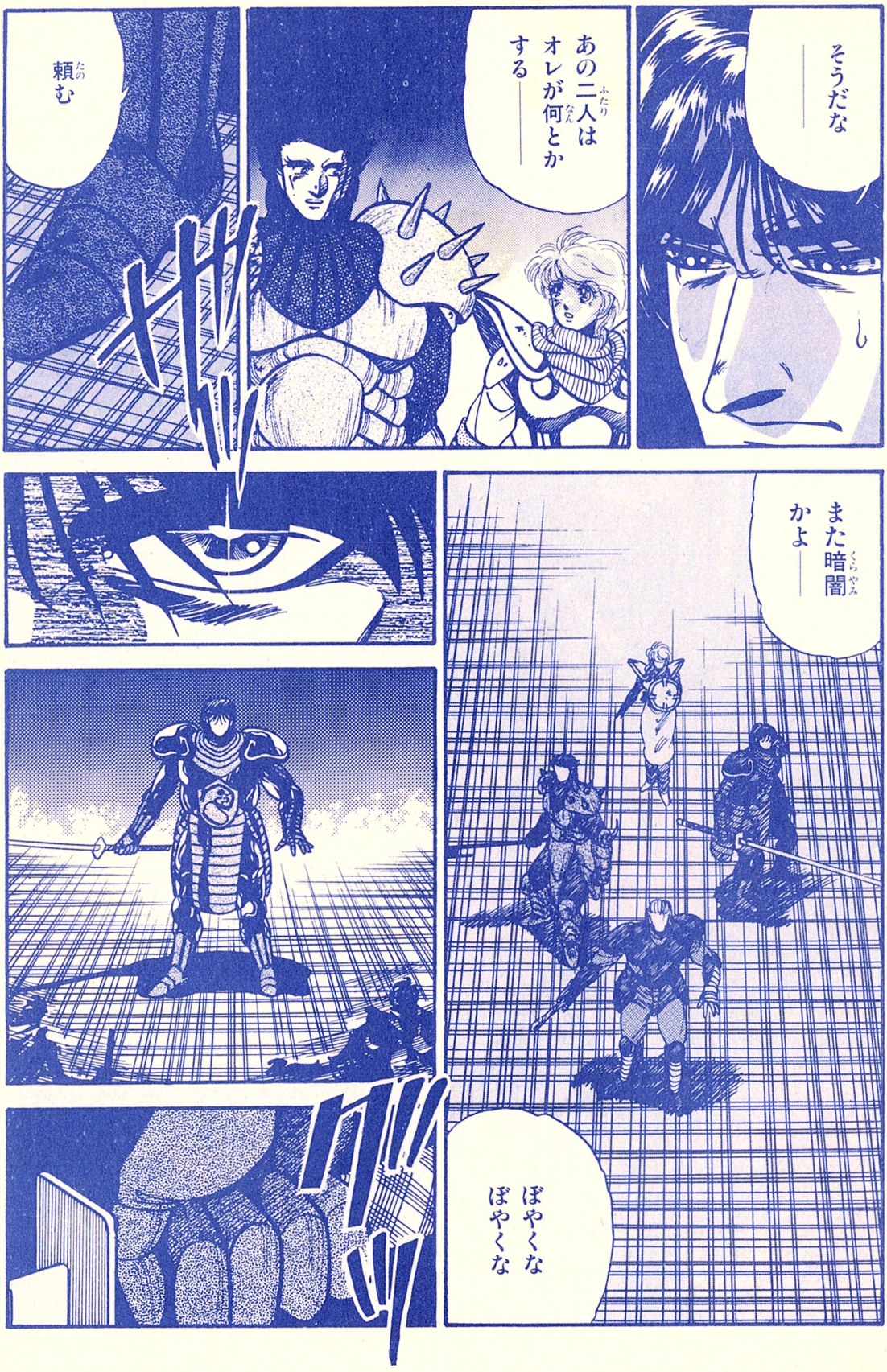

以前何を
していたか
知らぬが

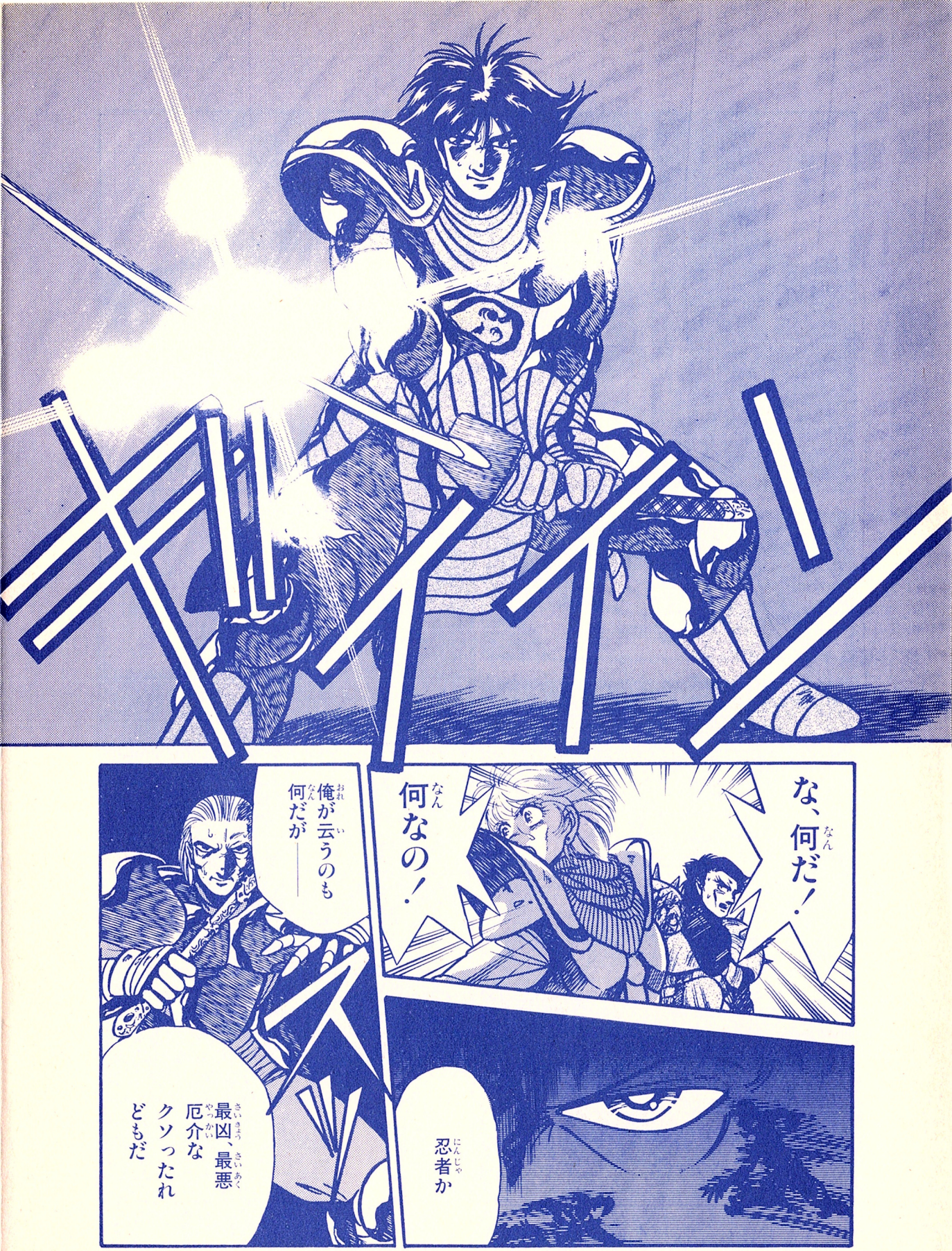

ほんとに
もう良いの？


ああ
——
心配しなくて
いいよ
リィナ——


そ…う

サンザ
急ごう
どうした？
圧迫感が
近付いて
来る
圧迫感
まさか
お前を
狙っている
ショウ
そいつに
追付かれたら
先に行け
鳳龍の剣の
使い手同士の
戦闘は危険
過ぎる
巻き込まれたら
他の者の
生存確率は
著しく低下
する

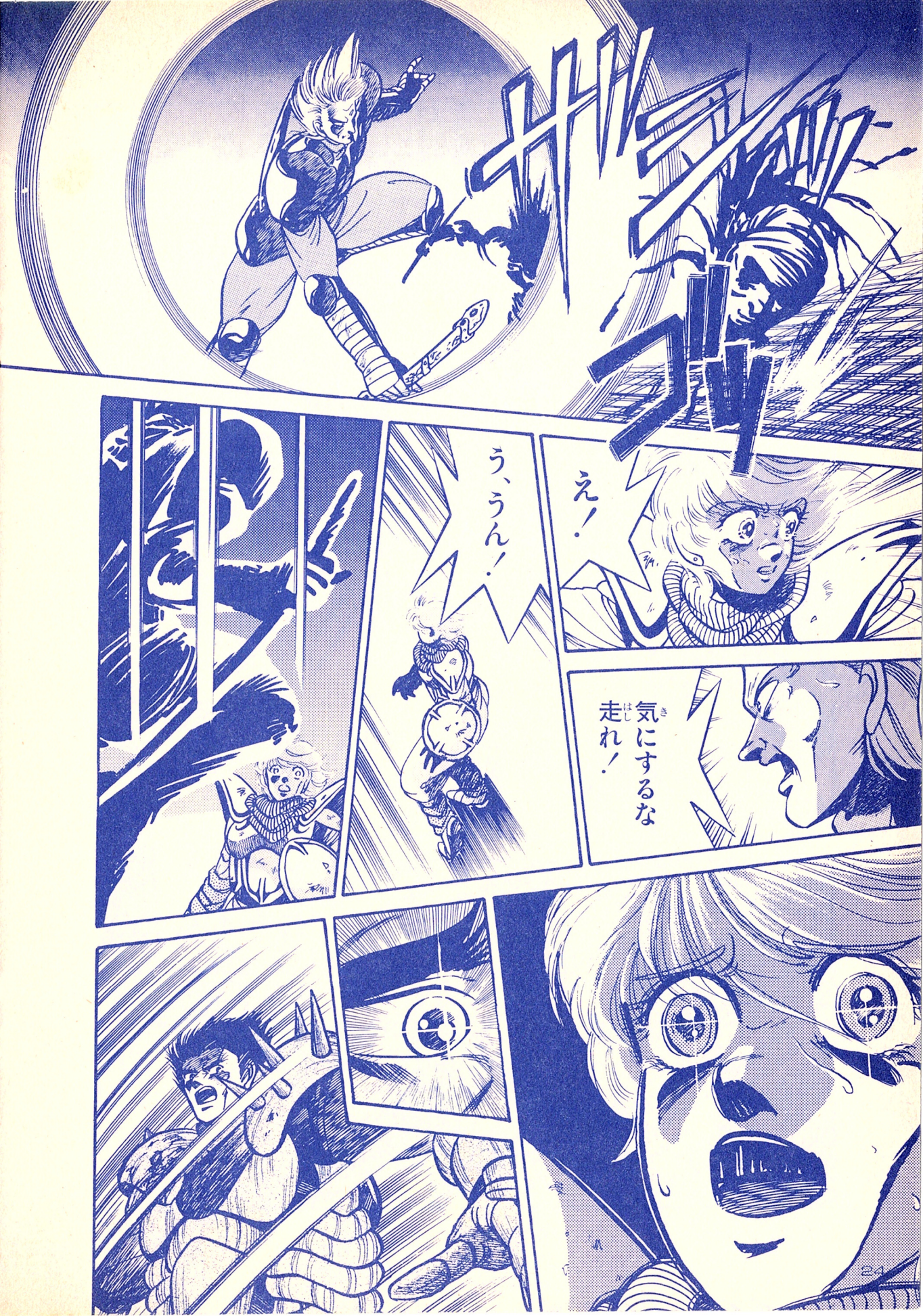

そうだな
あの二人(ふたり)は
オレが何(なん)とか
する――
頼(たの)む
また暗闇(くらやみ)
かよ――
ぼやくな
ぼやくな


な、何だ！
何なの！
俺が云うのも
何だが——
最凶、最悪
厄介な
クソったれ
どもだ
忍者か

まずいな
結構な
人数だ
下手すれば
誰かの首が
飛ぶな……
こんな
場合は
壁際まで
後退して
敵の攻撃の
範囲を
少しでも
狭めるしか
ないか……
後退だって

猛炎（ラハリト）！
気配を殺し
相手が
気取らぬ内に
息の根を
止める
熟達した
忍者なんか
その最たる
もんだ——

今も寸前にショウが気付かなかったら
お前の首は胴体から切り離されていたぞ――
わかったかテツ
う…ああ…
それじゃ――
走るぞ！


え！
う、うん！
気にするな走れ！

何(なに)!
テツ!
背後(うしろ)!!

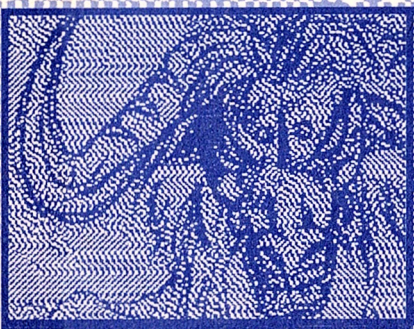
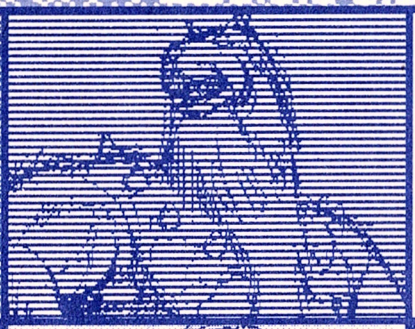
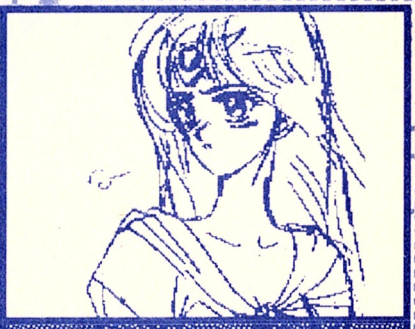
ここまでのお話は「鳳凰の塔・前編」として8月上旬に単行本化決定!!

次号(Vol.13 6月15日発売)につづく!!

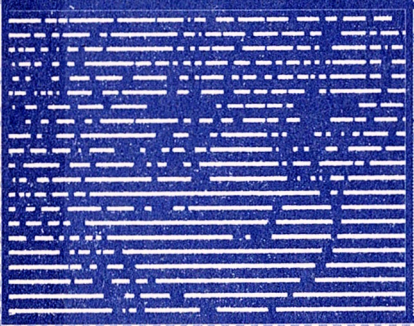
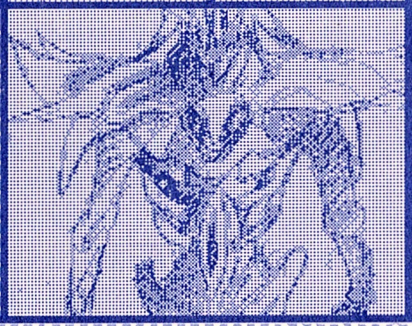
JICC出版局

コミック版

リンクの冒険

かつて、〝勇気ある少年〟が、トライフォースを集め、魔王ガノンを討ち破り、そしてゼルダ姫を救った。ゼルダ姫はトライフォースの力を満たす6つの神殿を建て、その輝きで魔族より国を守った。6神殿にはそれぞれ〝勇気ある少年〟の像がたてられ、魔の脅威は去ったかに見えたが……!? 名作の誉れ高き、「ゼルダの伝説」に続き、巨匠未将崎雄が描く究極のファンタジーコミック！「リンクの冒険」いよいよ登場だっ!!

作・未将崎雄
7月発売予定
予価900円

ウィザードリィ外伝第2部・前編

鳳凰の塔

作・石垣環
8月発売予定
予価900円

己の構築したウィズワールドに読者を引きずり込む石垣環氏の力量は、前シリーズの三部作ですでに示されている。オリジナルストーリーとして始まった今回の外伝シリーズでも、それが衰えることなくさらにパワーアップしつつあることに僕は期待と同時に驚きすら感じてしまっているありさまなのであった。外伝第一部解説・ベニー松山。

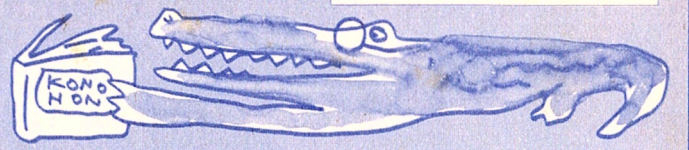
お待たせしました。コミック版ウィザードリィ外伝第2部「鳳凰の塔」ついに単行本化決定！ショウ、ルーシディティのすさまじき活躍に、期待!!

書店にない場合は当社までお問い合わせ下さい ☎03-284-4621 ※価格はすべて税込みです。

TVゲーム世代のためのスーパーブックガイド

この本を読め!!

by柴尾豊太郎



第八回『ルーフワールド』

クリストファー・ファウラー著　ハヤカワ文庫FT

ロンドン! ロンドン! ロンドン!

一度も行ったことはないのに、心のなかのどこかに、しっかりと存在して、何度も行ったことがあるかのように感じられてしまう町がある。

ぼくにとって、ロンドンはまさにそういう町だ。

はじめて、ロンドンに出会ったのは、H・G・ウエルズの小説「宇宙戦争」を読んだときのことだろう。

その後、ロンドンはいくつもの推理小説の中で、ホームズをはじめ、名探偵が活躍し、ジョン・クリストファーやジョン・ウインダムの破滅ものSFの中で何度も危機に瀕し、あるいはドラキュラや切り裂きジャックの闇歩する町としてぼくの心の中で息づいている。

映画のなかにも何度も登場した。「スペースバンパイア」が襲ったのはロスアンゼルスやニューヨーク、東京ではなく、ほかならぬロンドンであっただけにあれほど奇妙で、迫力のある映画になったわけだし、ちょっとマイナーな映画だけど「名探偵ベンジー」や「ビグルス　時空を超えた戦士」、「戦場の小さな天使たち」なんて映画で見たロンドンはいまでも明確に思い出すことができる。

それほど心のなかに息づいているロンドンだけど、不思議なもので、実際に行ってみたいという気持ちはおこらない。行ってみて、想像の中のロンドンの形が壊れるのがいやなせいかもしれない。

ぼくにとってロンドンは本や映画の舞台として、なかば神秘的な存在でいるのがいいのだ。

そのロンドンを舞台にした小説がまた1冊でた。「ルーフワールド」というその小説はほかならぬロンドン、ただ一ヵ所だけを舞台にして、ロンドンでなければありえない設定を生かしている。

ただ、この小説がどんなものかを説明するのはちょっと難しい。なにしろ、殺人のための怪しげな儀式がプロローグで、まるでホラー小説のような始まりだなと思っていたら、その儀式の犠牲者が町中に空から降ってきて、犯人探しにスコットランドヤードの刑事が動きだすあたりは明らかに推理小説ノリだし、おもむろに主人公が登場するあたりは「まきこまれ型」といわれる冒険小説的な展開になっている。

やがてありえざる世界の存在が明らかになってくる。

その世界が「ルーフワールド」だ。地上の生活から逃げだした人間たちが、ある種のユートピアとして築いた世界。建ちならぶ建物と建物の間にロープをはりめぐらし、日々の生活に追われる地上の人間が見上げもしない屋根の上を自由に行き来していく。

中盤以降の物語ではこの「ルーフワールド」が真っ二つにわかれ、ユートピアを築こうとする善の勢力と、錬金術の秘儀を現代によみがえらせようとする悪の勢力との熾烈な戦いが描かれていくんだ。

映画業界出身の作者だけあって、ストーリー構成は非常に映画的だ。映画をもとにしたノヴェライゼーションといっても通用するんじゃないかな。

もう何でもありの福袋のような小説。でもそれができたのはやっぱり、魔都ロンドンを舞台にしたおかげだと思う。ほかの都市じゃ、こうはいかないもの。

➡「ルーフワールド」クリストファー・ファウラー著、竹生淑子訳、ハヤカワ文庫FT-37（640円）この本を紹介したもうひとつの理由は表紙にあるのだ。必本読者にはおなじみ、「アリスの電脳遊園地」の品川るみさんが書いているんだ。これだけでも買う価値は十分あるはず。

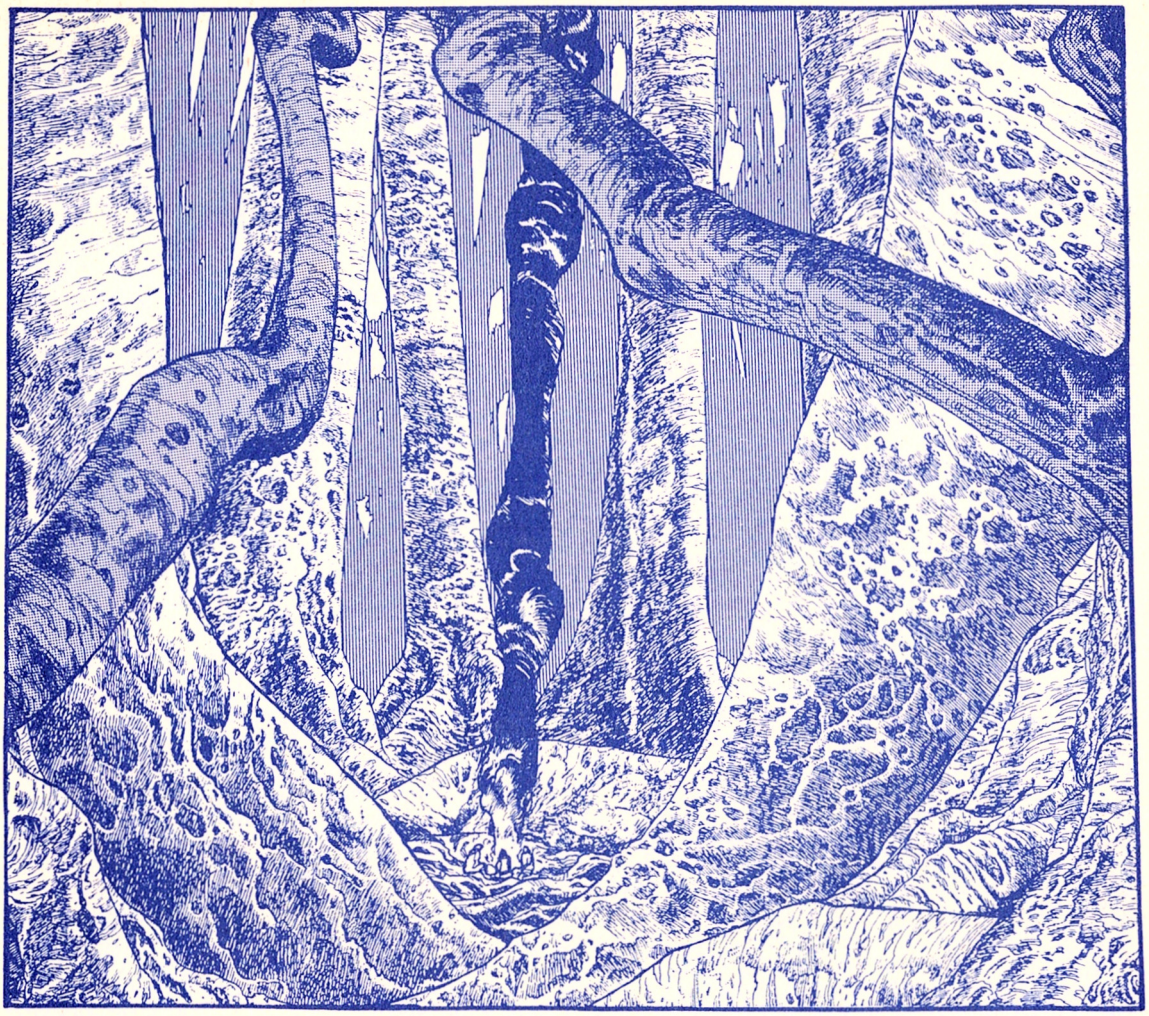
エルフの秘密を知ったグレイの苦悩は続く……

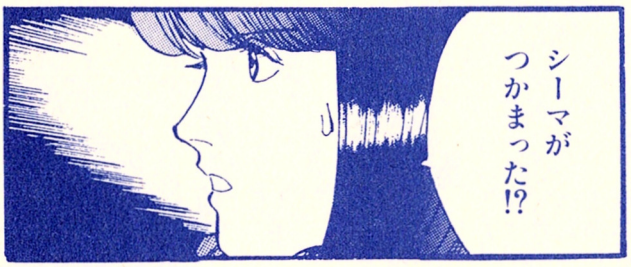
DRAGON LORE
最後の竜に捧げる歌 II

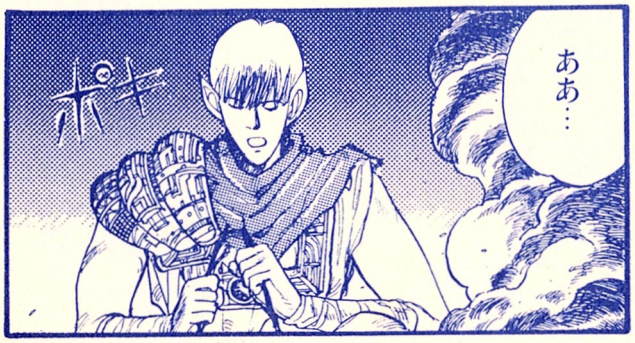
SCENE⑧
エルフの秘密

by 外薗昌也
原作 手塚一郎

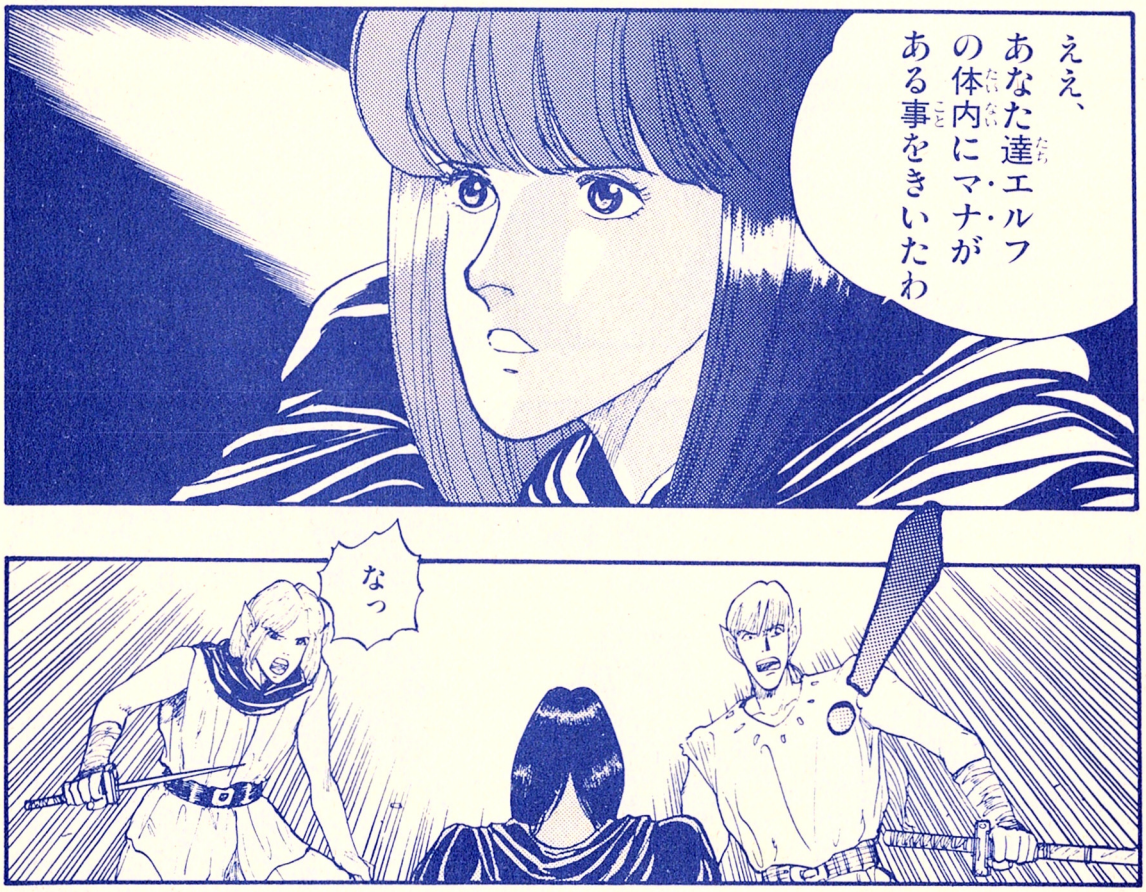
●前回までのあらすじ／死の砂漠「大喰らい」の拡大を止める手がかりを求め旅に出た女魔法使いグレイと妖精族シーマ。かつてグレイが兄と慕ったアクィナスとの戦いを経て、ついに「大喰らい」の謎が解かれる!!




シーマが
つかまった!?

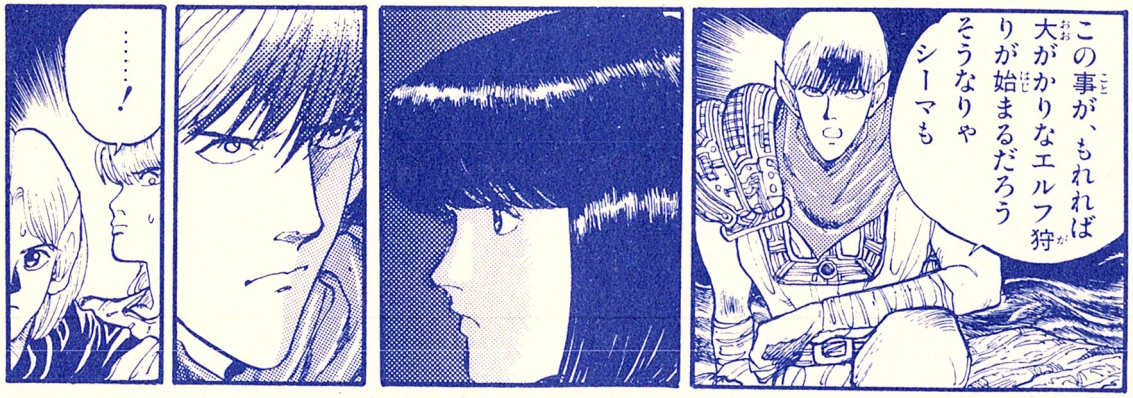

ああ…

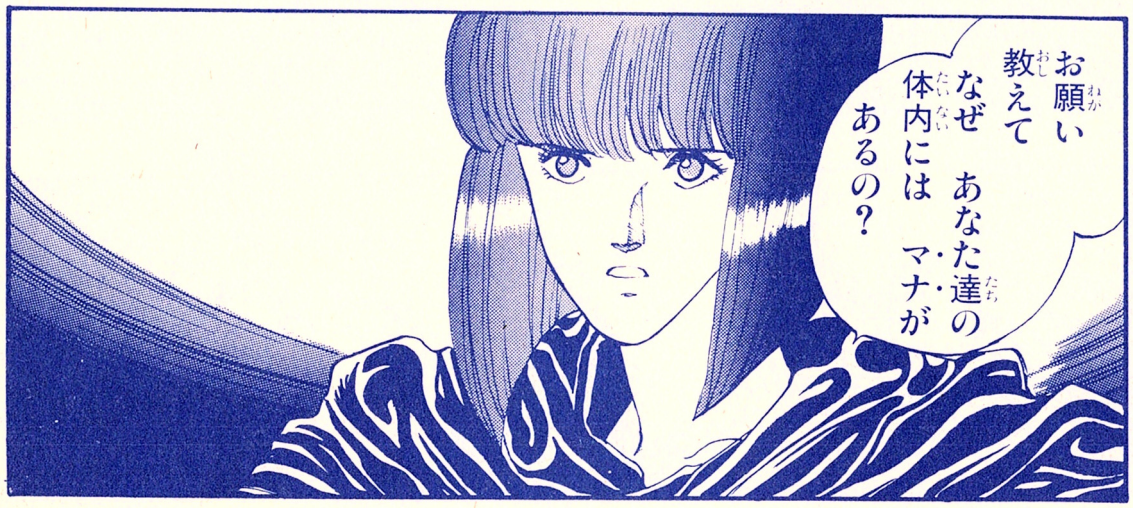
オレたちめがけて樹人共が、まとめておそいかかってきた
それを　あいつ、オレをつきとばして身がわりになりやがった
すまね
そう、あなた達もほとんどさらわれたんだもん仕方ないわ
シーマ…
あなたらしい…
ア　アクィナスの奴に　何かきかなかったか
その…オレ達、エルフの事を何か……


ええ、あなた達エルフの体内にマナがある事をきいたわ
なっ

この女を殺そう！
そういう決まりだ!!
我らの秘密を知った上は生かしておけん!!

その必要はない！この女は秘密をもらさない！
何、いってんだアルフダイア!?


この事が、もれれば大がかりなエルフ狩りが始まるだろうそうなりゃシーマも
……！


お願い教えてなぜ　あなた達の体内には　マナがあるの？

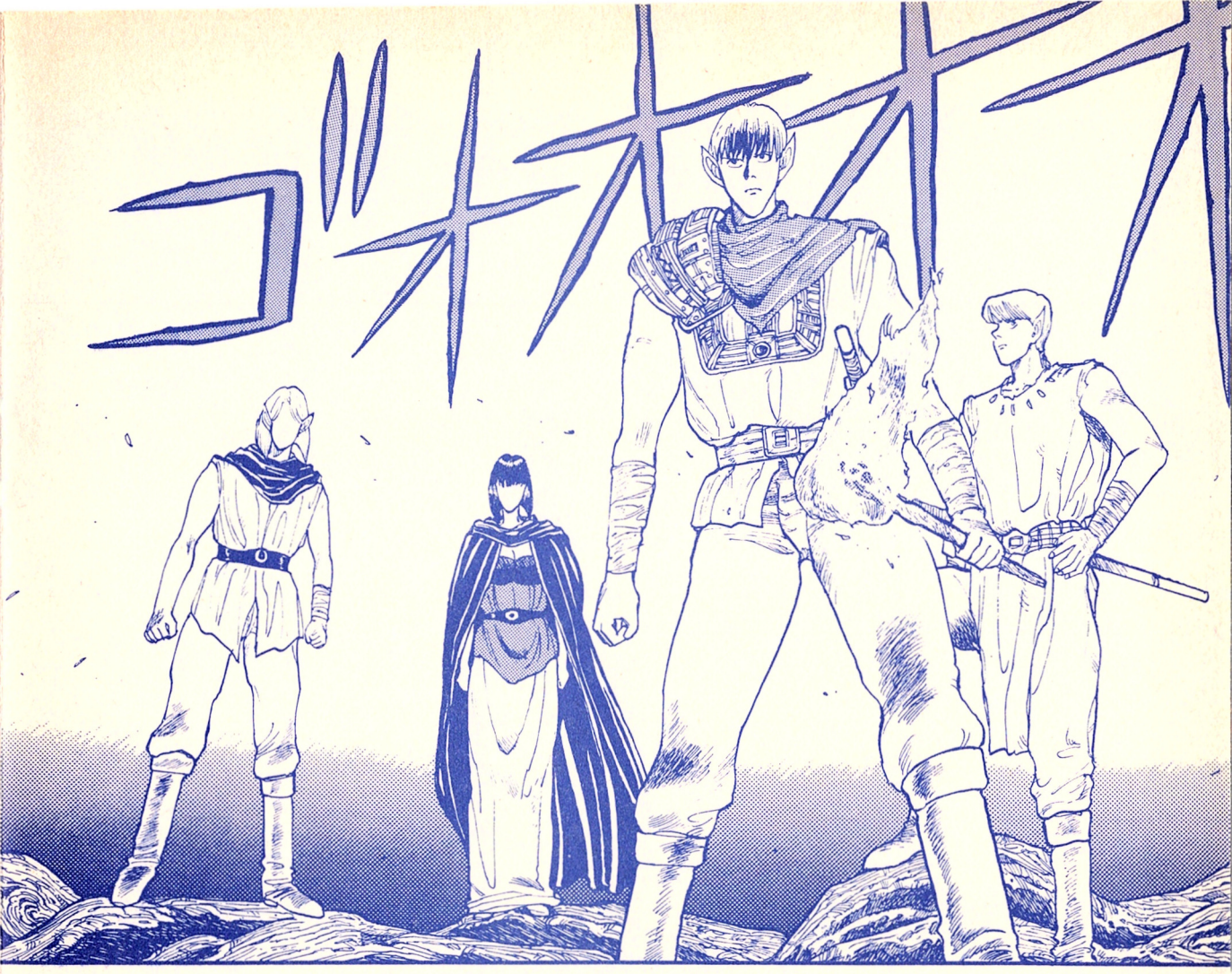
その昔
リーグワードという
大魔導師が
いた
その男が
ある日 未来を占い
魔術がすたれ マナの
枯渇したこの時代を
幻視した
その男は考えた
未来を憂え 人の体内に
マナを貯え 純化して保とう
とな…
それが、
エルフ――!
そいつを
あのアクィナスは感づき
やがった!!
奴だけは 絶対に
生かしておかん
この手で必ず、殺してやる!!

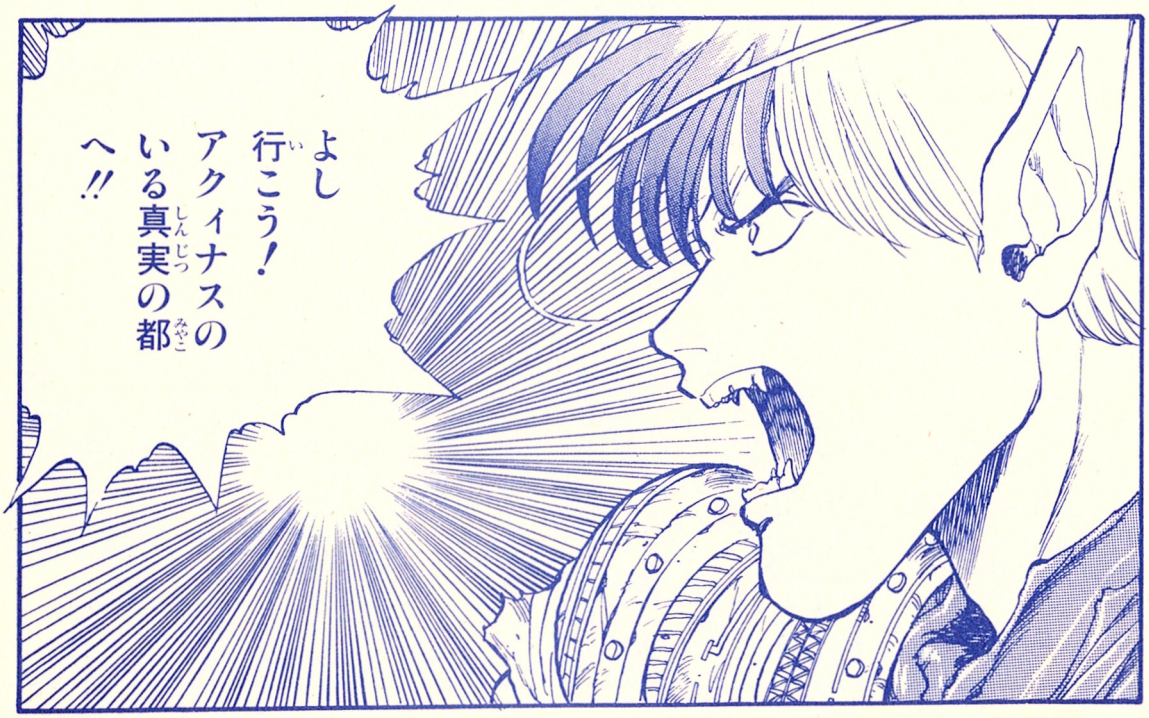
よく考えろグレイ!!

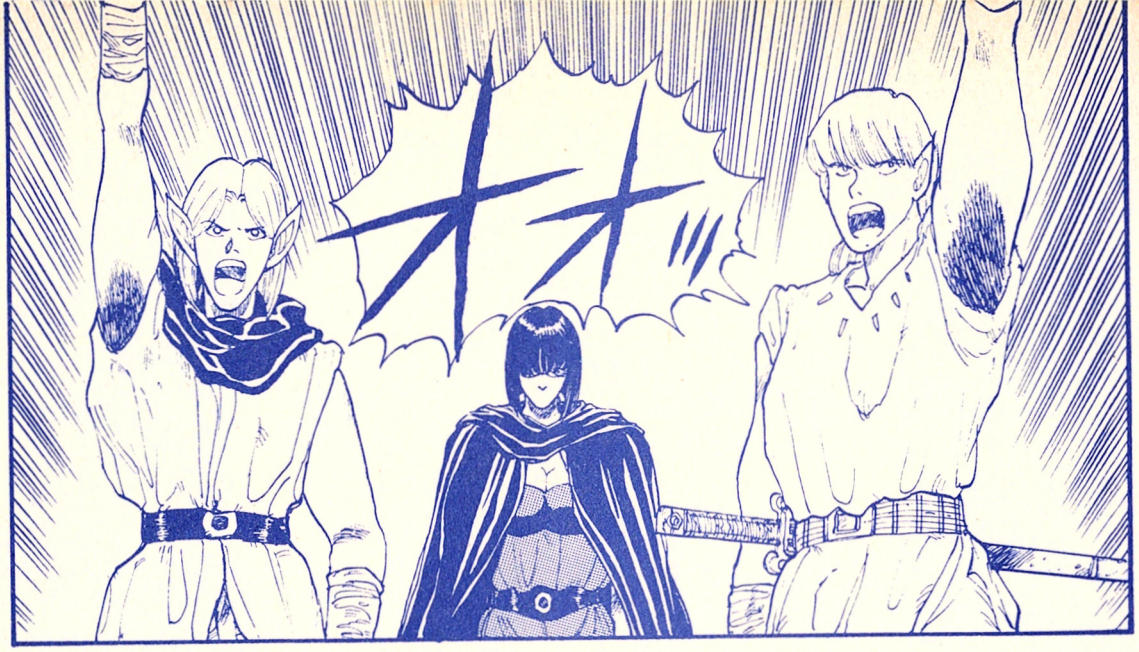
この世界からマナがなくなればお前の好きなシーマもこうなるんだぞ!!

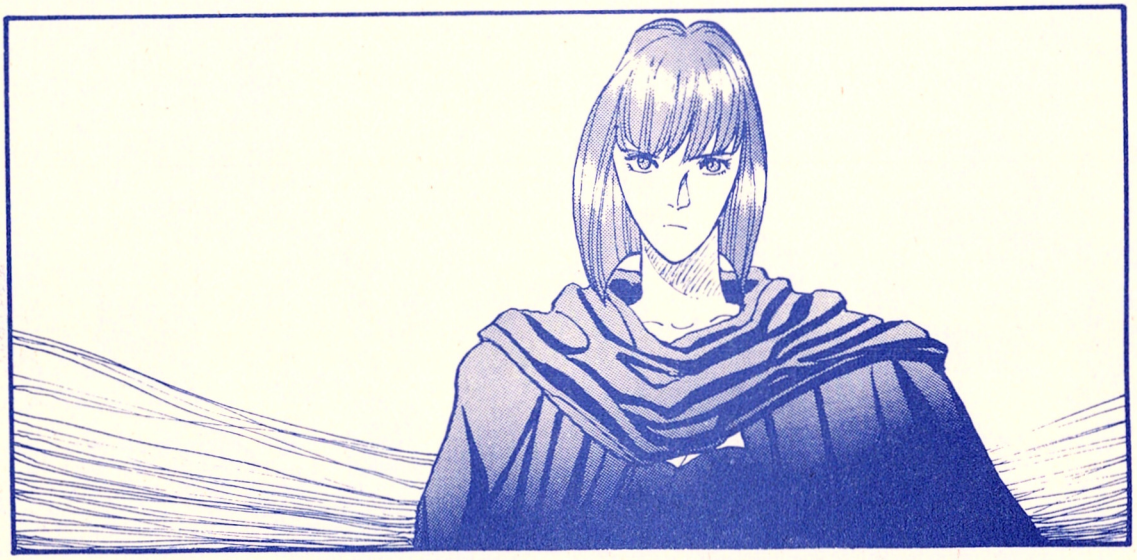
シーマ私はどうすればいいの!?

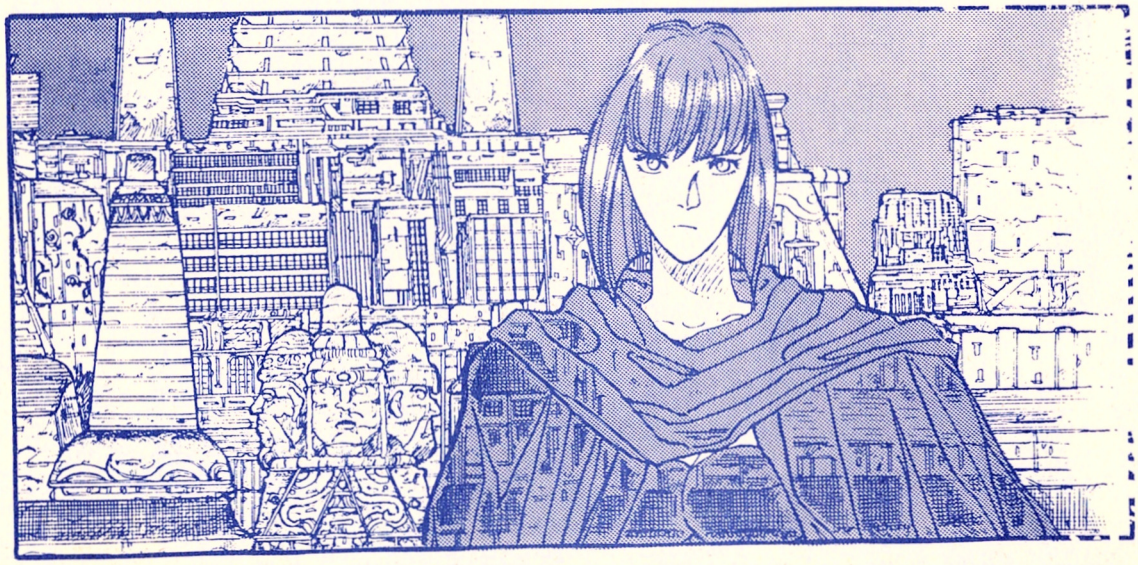
ゴオッ

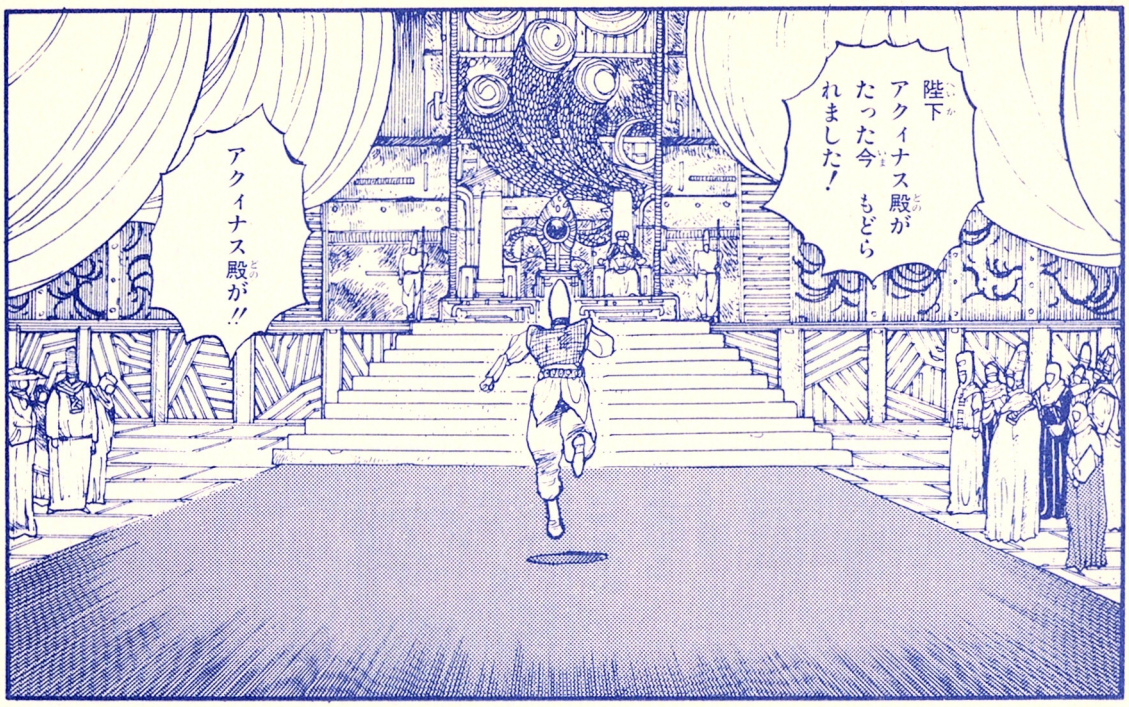

コリオオオオ


よし
行こう！
アクィナスの
いる真実の都へ!!

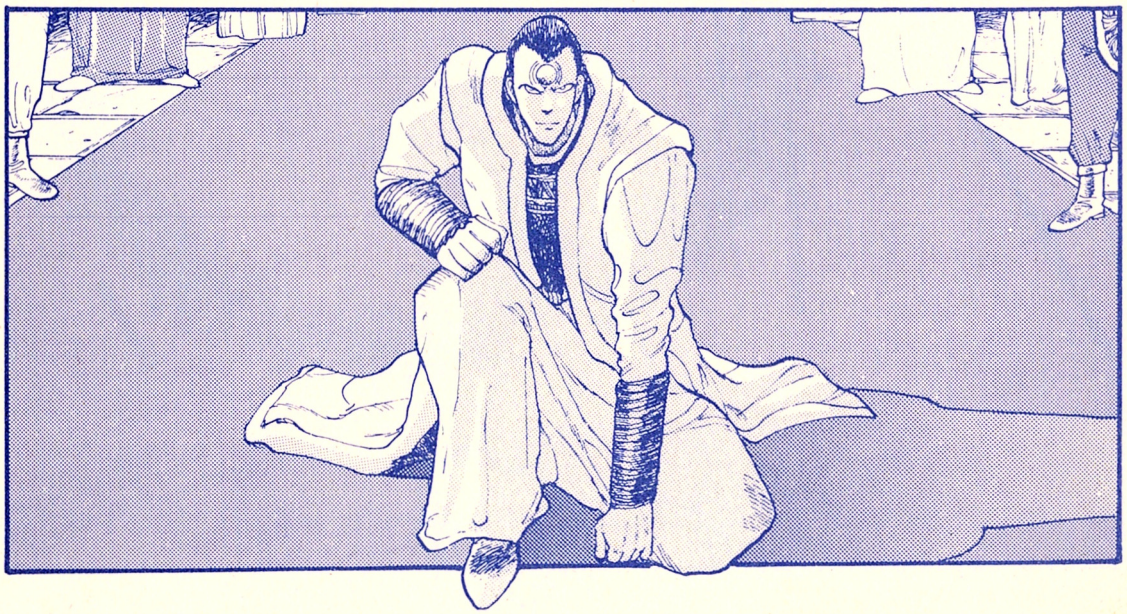

オオ!!!

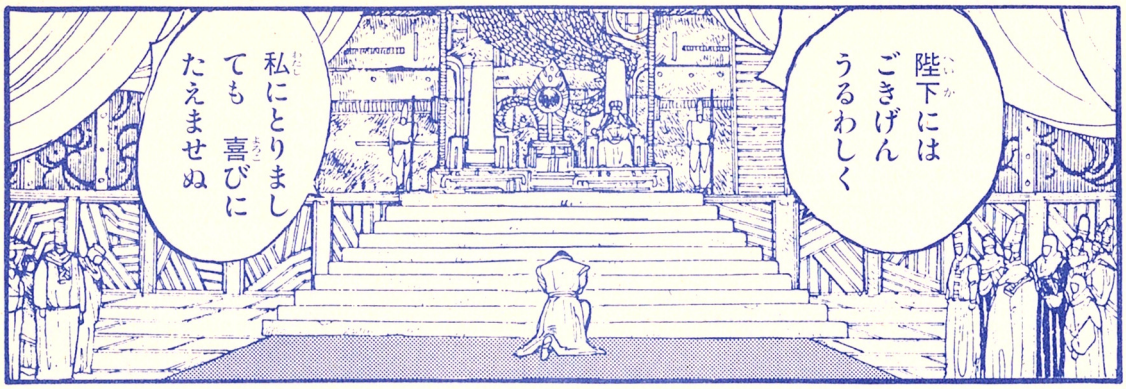


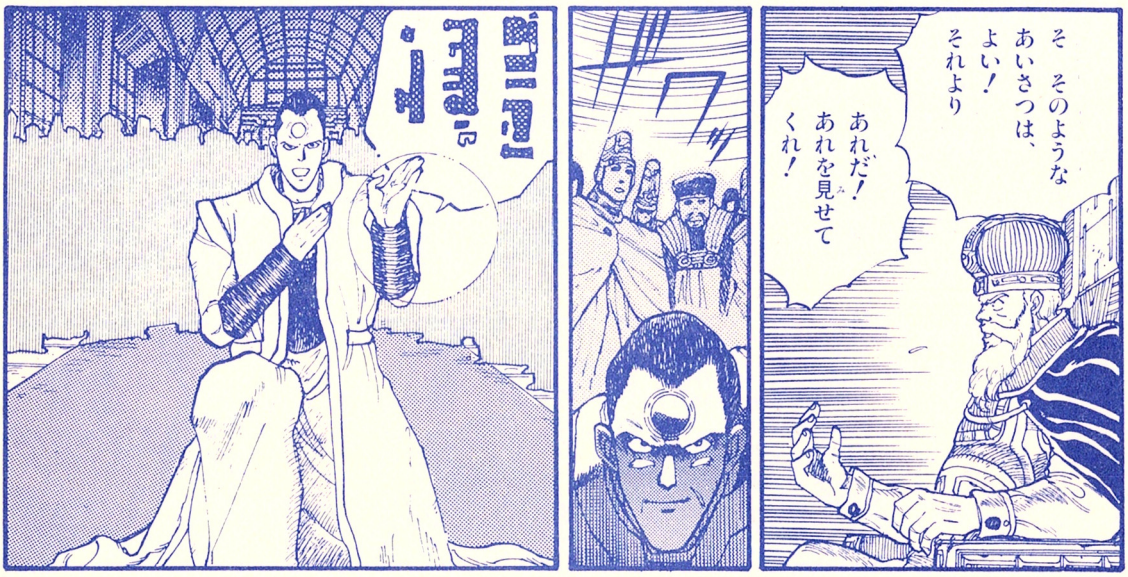


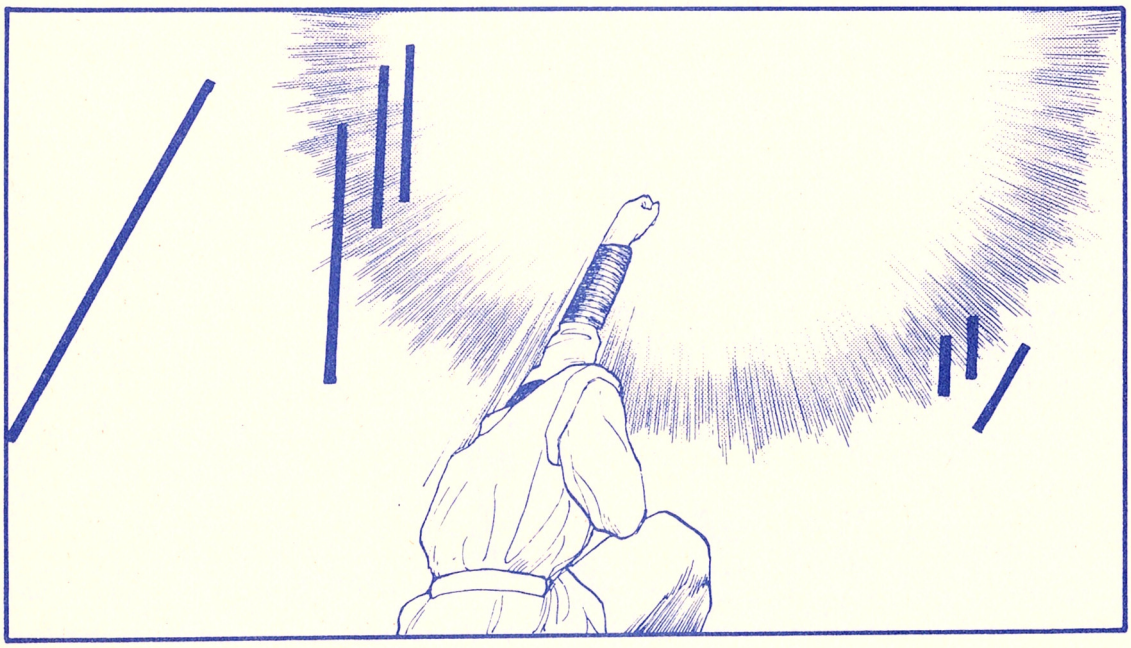

陛下
アクィナス殿がたった今 もどられました!
アクィナス殿が!!

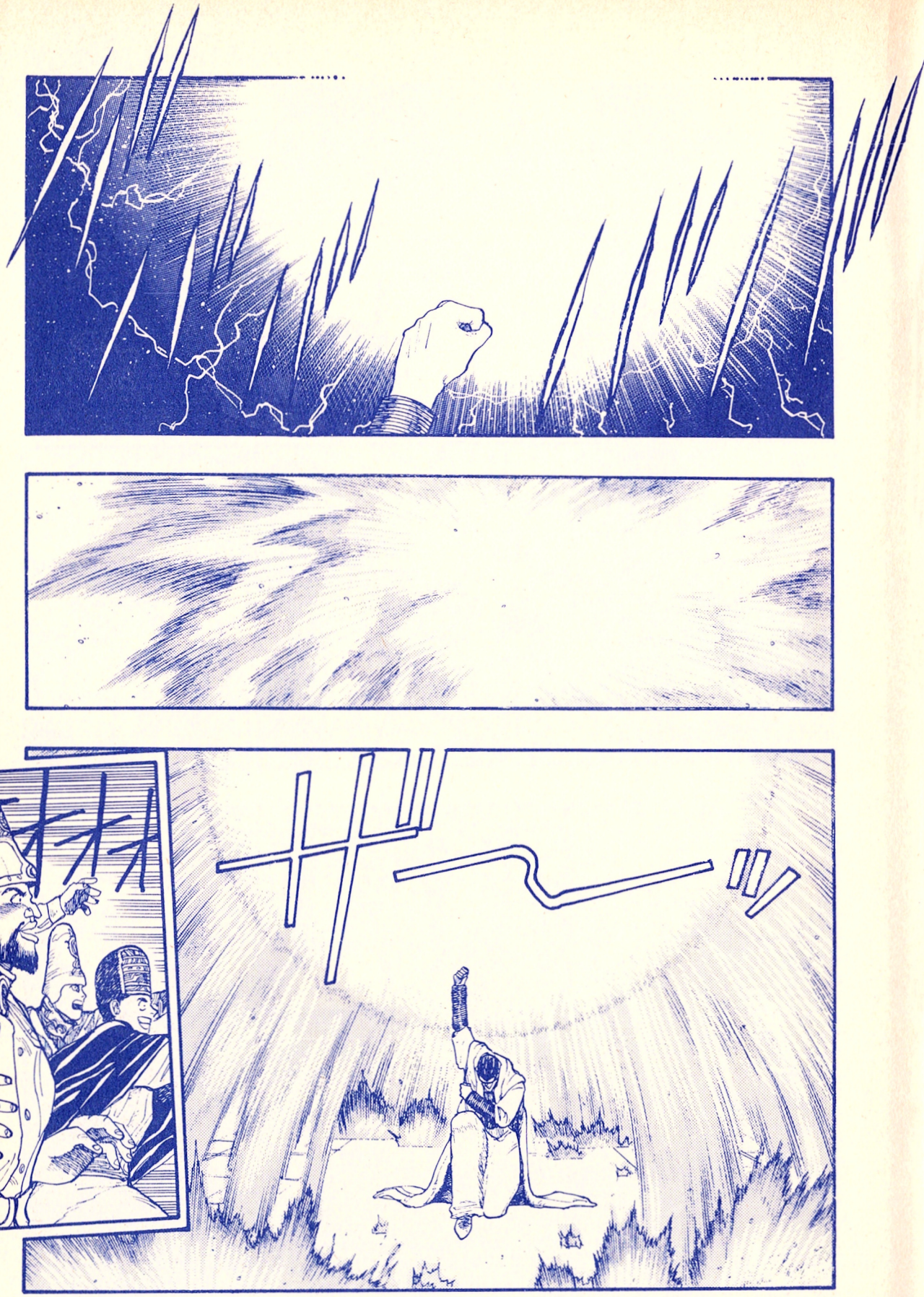
おっ
おおっ
アクィナス!!
一年もどこへいっていた
心配しておったぞ




陛下には
ごきげん
うるわしく
私にとりまして
も 喜びに
たえませぬ


そ そのような
あいさつは、
よい！
それより
あれだ！
あれを見せて
くれ！

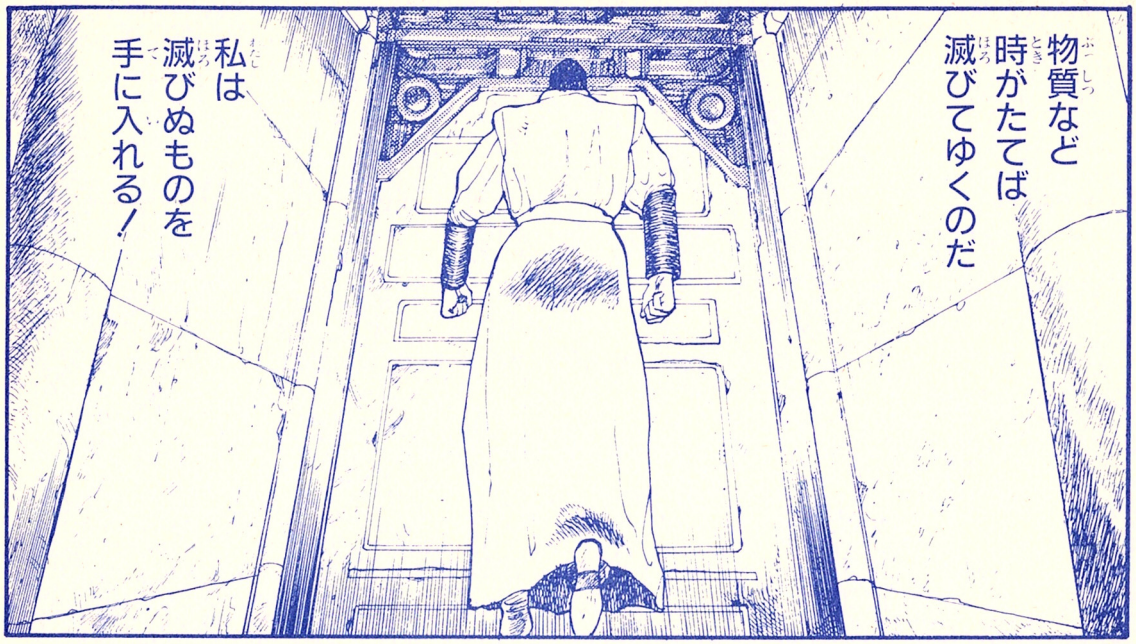


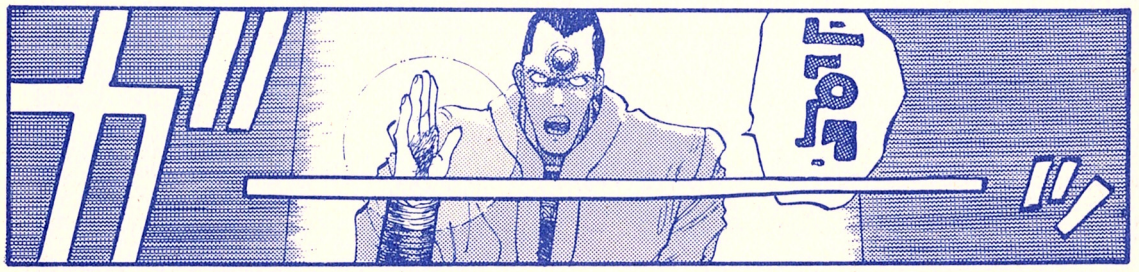


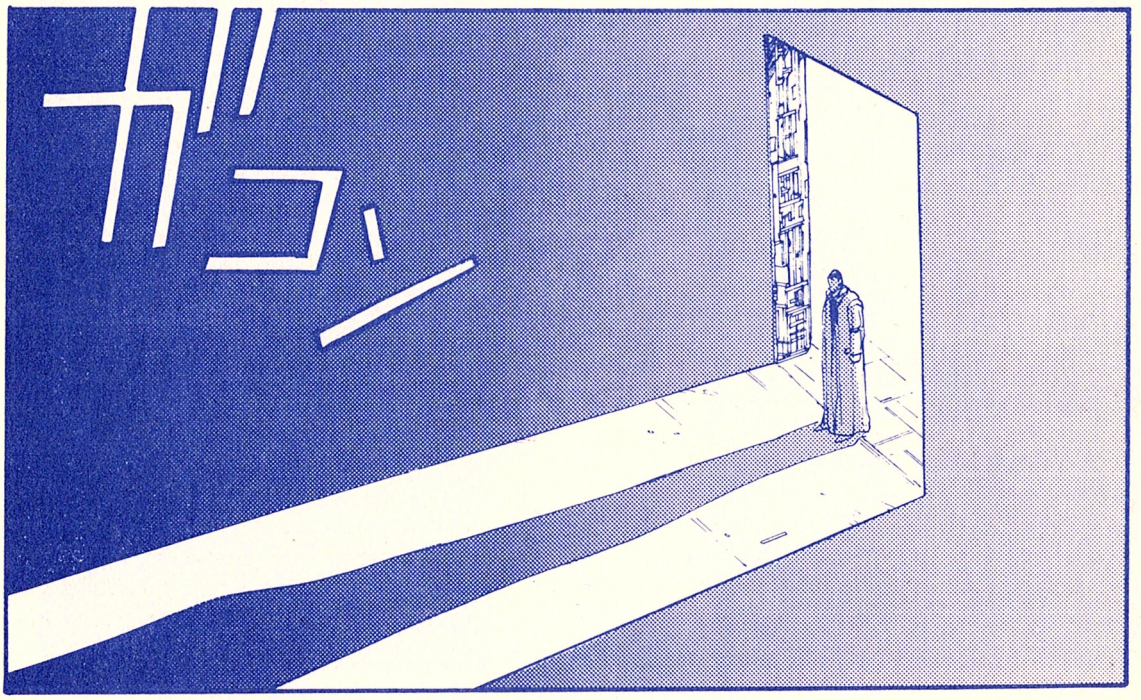
おれ様のだ！
うるせえ
ひいっ
こらとるなーッ
なにをー
金だ 金だぁーっ

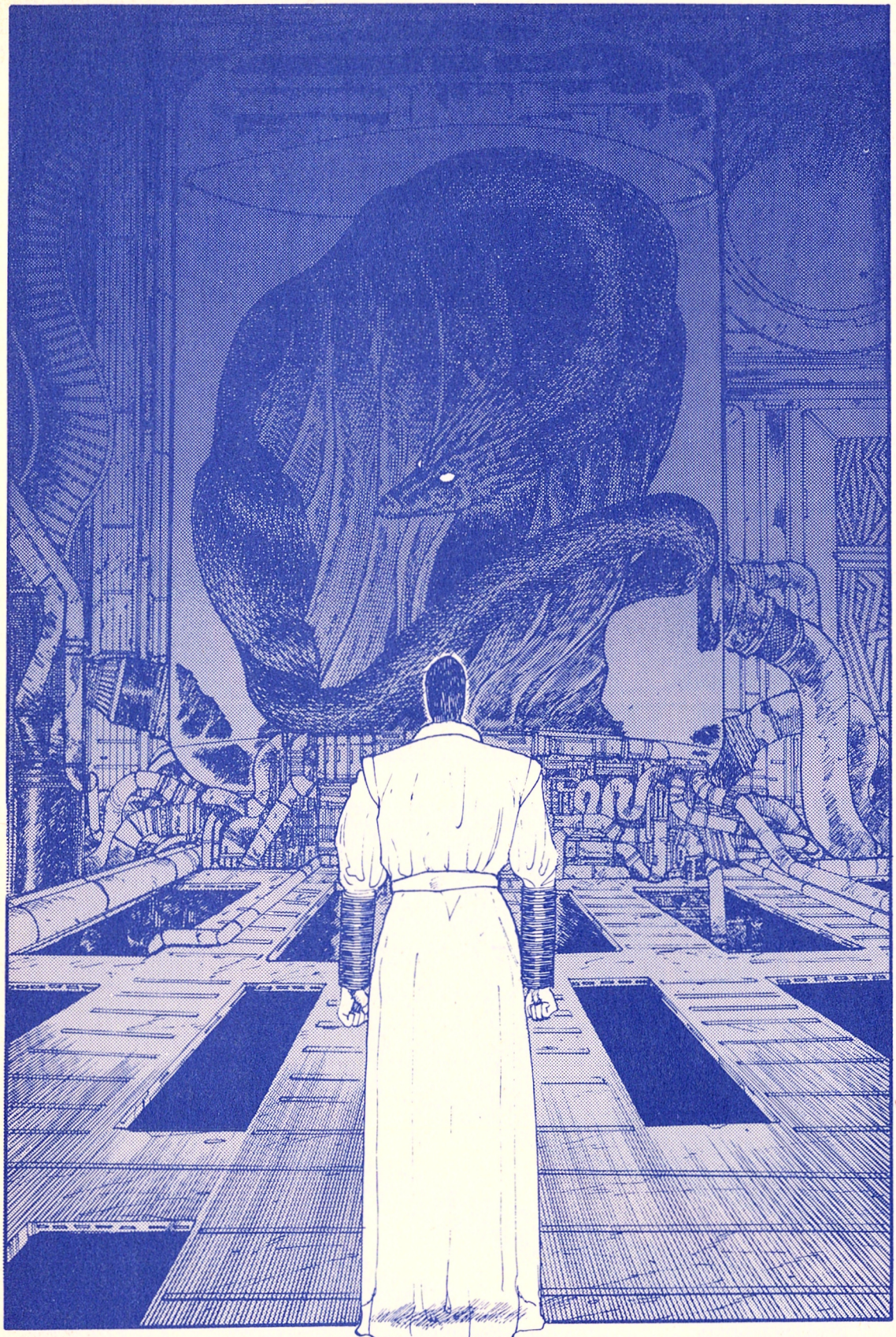
こらっ その金はわしのものだぞっ
衛兵
はっ
こらあっ
…！
シ
ふっ 豚どもが…！

金さえ与えておけば 俺様のいいなりだ
ちょろいもんだ


物質など
時がたてば
滅びてゆくのだ
私は
滅びぬものを
手に入れる！


ガ
ッ


ガコン



アクィナスの野望とは!?　次号、新展開を待て!!

次号（Vol.13　6月15日発売）につづく!!

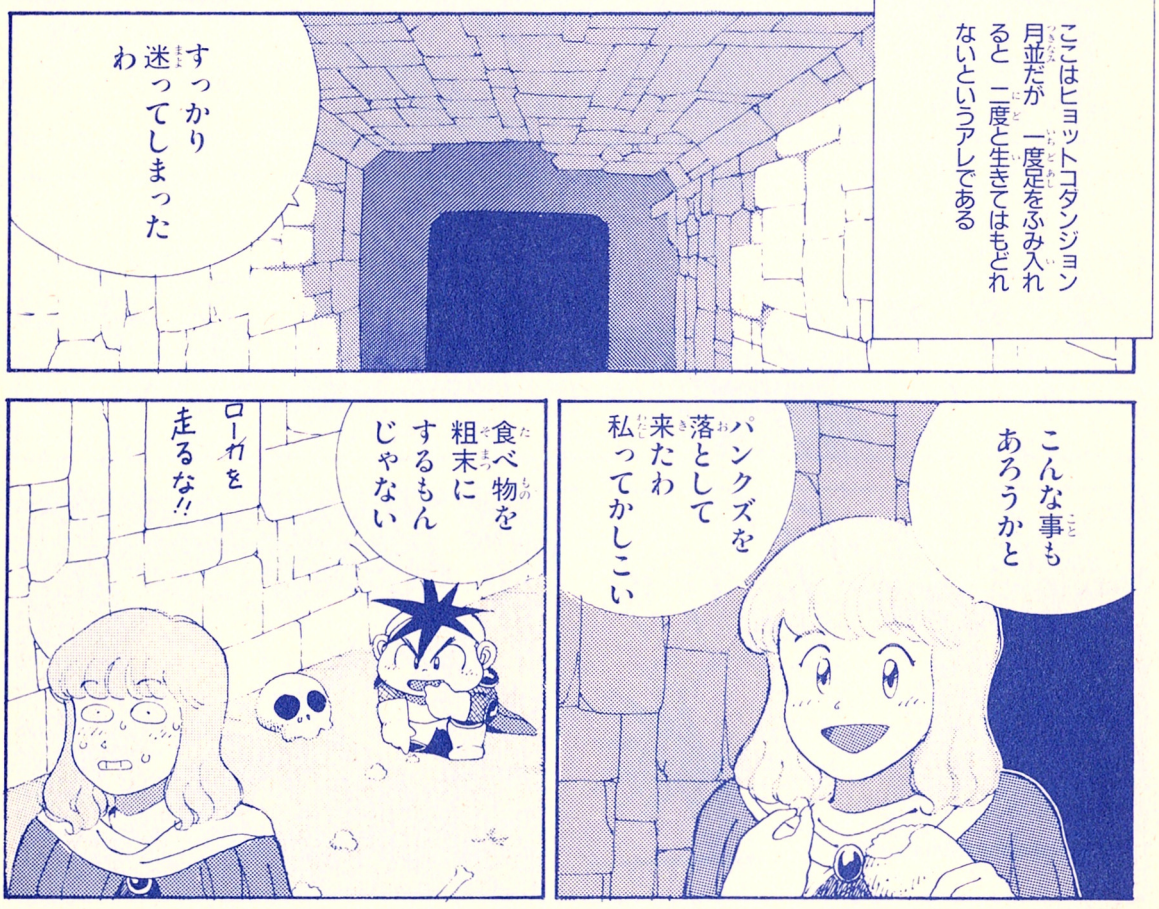
お宝捜しに挑んだてっぽう丸。その結末は!?

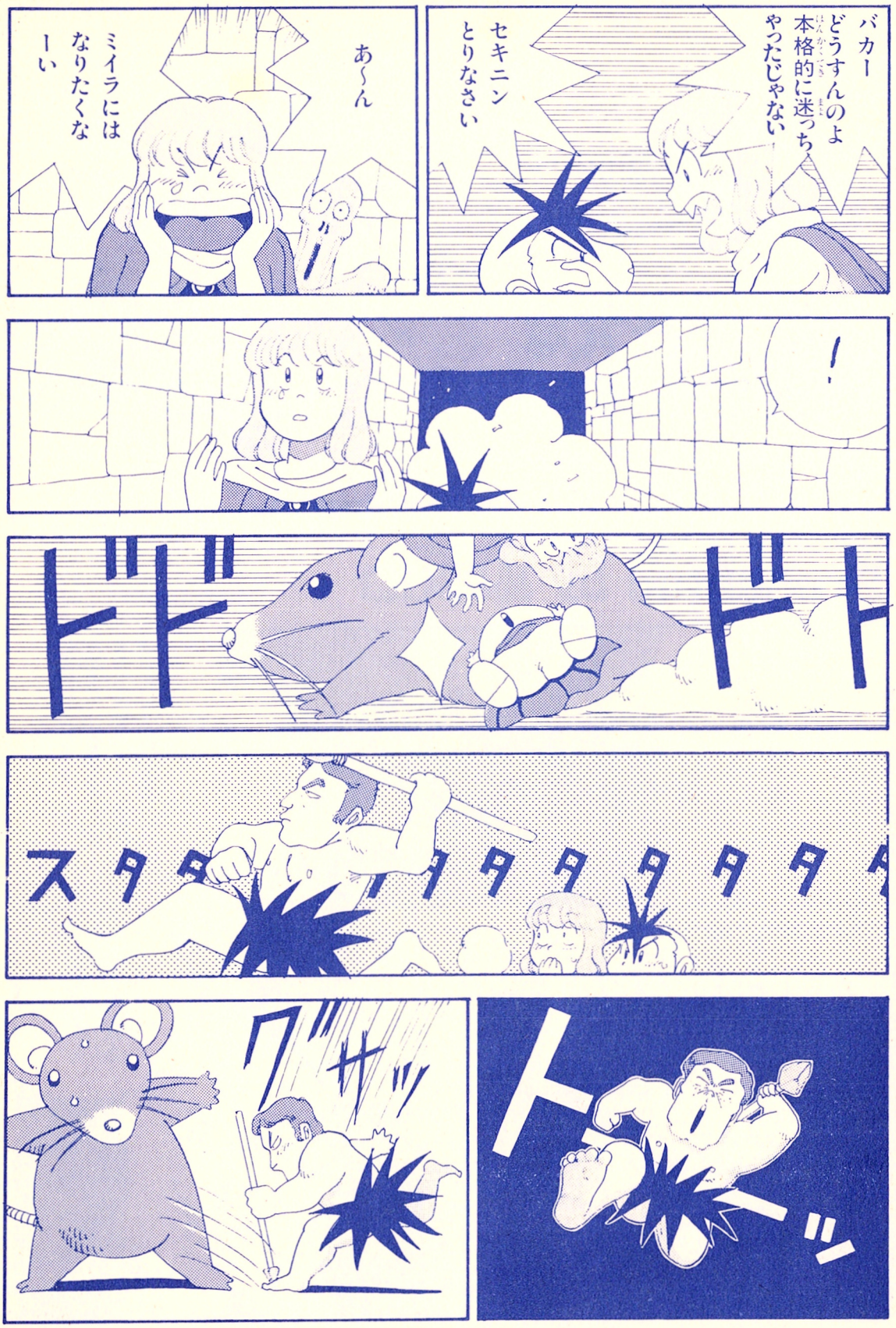
第8回

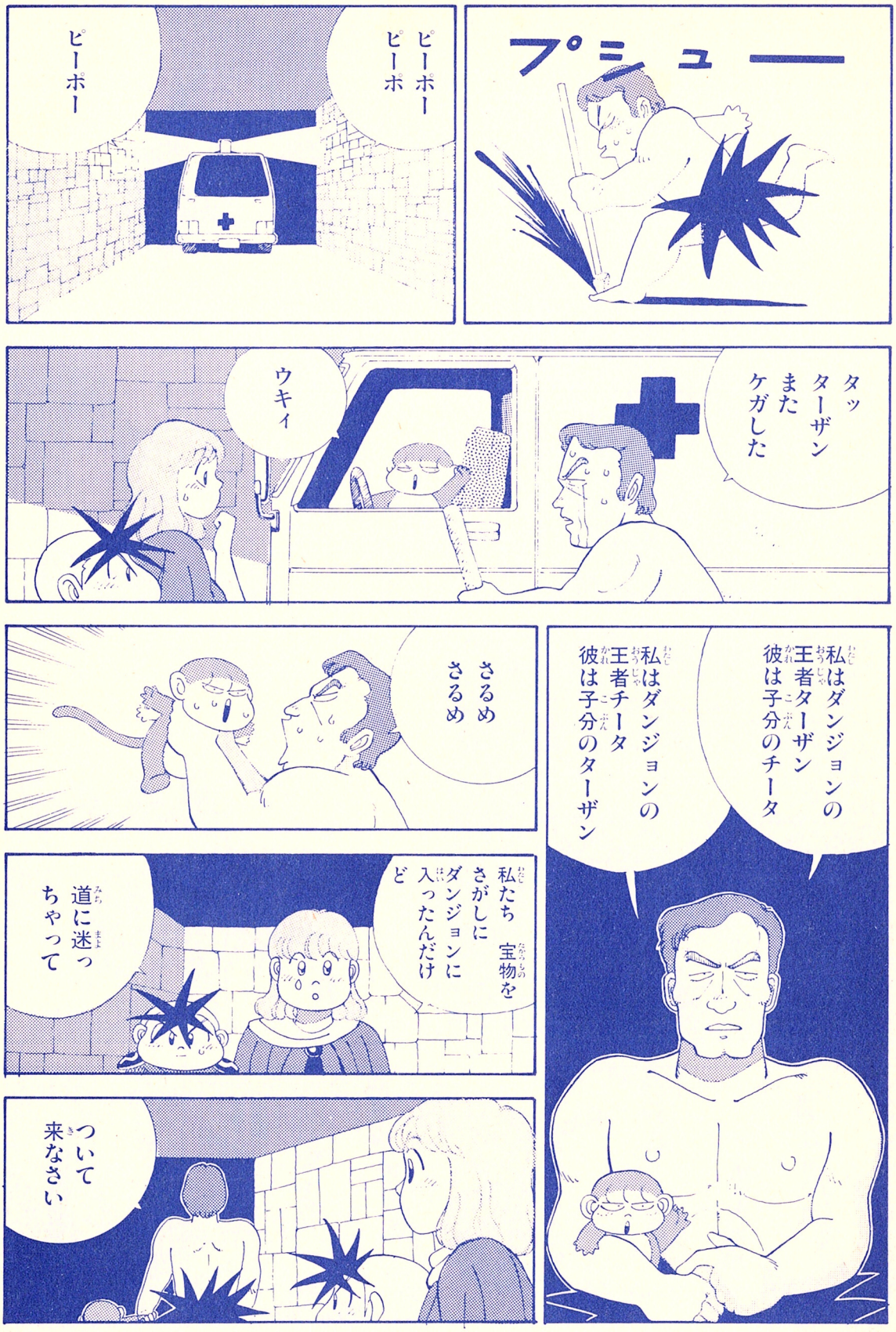
品川KIDの

死んでしまうとは何事じゃ!!

Presented by 品川KID




バカー
どうすんのよ
本格的に迷っち
やったじゃない
セキニン
とりなさい
あ〜ん
ミイラには
なりたくな
ーい
!
ドドド
ドト
スタタタタタタタタタ
グサッ
トーッ


プシュー
ピーポー
ピーポー
ピーポー
タッ
ターザン
また
ケガした
ウキィ
私はダンジョンの
王者ターザン
彼は子分のチータ
私はダンジョンの
王者チータ
彼は子分のターザン
さるめ
さるめ
私たち 宝物を
さがしに
ダンジョンに
入ったんだけ
ど
道に迷っ
ちゃって
ついて
来なさい

お宝が見つかってよかった!?　よかった!?

Wizardry®・II

小説ウィザードリィII

第17回 風よ。龍に届いているか

避けられぬ破滅を前に
善と悪の冒険者が手を結ぶ。
シヴラシアとマイーンズ
唾み合う二人の協調は
仲間を救う切り札となるか

作／ベニー松山
イラスト／高橋政輝

〈第十七章〉協力

「――ジヴラシア」

王宮の壕に面した小庭園で、俺はひとり石のベンチに腰掛けていた。

久しぶりに、月が見えていた。薄く雲のかかった夜空に、ぼやけた満月が浮かんでいる。

黄色く濁った月光が、北の空を渡る雲の腹を浮かび上がらせていた。上空には強い風が吹いているらしく、追い立てられる獣の群れさながらに雲は流れてゆく。

その下に、黒々と聳え立つ梯子山のシルエットがあった。

山頂から昇る噴煙が、まるでそれが雲にでもなるかの如く夜空へ溶け込んでいく。

鏡のように鎮まった壕の水面には、それらが逆さまに映し出されている。

俺は、それを眺めていた。

不気味なほど、穏やかな宵だった。まるで、大地が来たるべき大破壊に備えて力を蓄えているかのような――。

さあっと吹いた一陣の風に小波が疾り、水面の像は千々に乱れた。

その時だった。しばらく前から背後で俺を窺っていた男が声をかけてきたのは。

気配を感じた時から、俺にはそれが誰であるのか見当がついていた。だからこそ、あえて向こうが声をかけるのを待っていた。

そいつもまた、俺に気づかれていると知っていた。それだけに俺を呼ぶのを躊躇したようだったが、結局根負けした形になった訳だ。

「何だ」

波立った壕を眺めたまま、振り返らずに俺は応えた。

「話がある」

言いながら、男が石畳を踏む足音が近づいてくる。

ベンチの横に、平服に着替えたマイノスが立った。

前号までのあらすじ

精霊神グニルダの恩寵により、あらゆる外敵から守られ続けてきたリルガミン市。しかしその聖都も原因不明の天変地異に見舞われ、滅亡の一途を辿っていた。異変の原因究明のため王国は多数の冒険者を募り、街の北に聳える禁断の山〝ズケイル〟に隠された神秘の宝珠の探索を命じた。

探索を続けて約一年。冒険者たちは自らの能力を磨き、山中の迷宮は宝珠の守護龍ルケブレスの護る最上層を残して全て踏破された。使命の達成は目前であった。そしてついに、主人公ジヴラシアのグループであるガッシュ、マイノスらの善のパーティが最上層の探索に出発したのだった。

しかし翌朝、一行は消息を絶った。捜索隊が急ぎ組織され、ハイランスの指揮する三隊の善のパーティが迷宮へと向かう。一方身動きの取れぬジヴラシアとディー、ザザは王宮に召喚され、王国の統治者ベイキ女王との謁見を行っていた。そこに善のパーティのひとりアルタリウスが現れるが、それはすでにアルタリウスではありえぬ奇怪な生物と化していたのであった。分裂、増殖を繰り返す妖獣に苦戦しながら、重傷を負い生還したマイノスの援護で辛くも女王を救う三人。もうひとりの妖獣エレインが冒険者の宿に向かったのを知り、ジヴラシアとディーはすぐさま転移の呪文で跳ぶ。しかし時すでに遅く、残留組の悪の冒険者は全員妖獣の餌食となっていた。分裂した妖獣たちを全滅するべく、ディーは爆炎の呪文で宿を焼き払う。ジヴラシアは逃げ出したエレインを屠ったが、同時に石化され、同化されかけたところを謎の男に助けられた。その夜、王宮ではマイノスが持ち帰った神秘の宝珠を用い、異変の原因を報告するための晩餐が開かれたが、そこで賢者たちが告げたのは間近に迫る大破壊であった――。

主な登場人物

●ジヴラシア……主人公。レベル13の忍者。悪・人間族。この物語の〝俺〟。
●ガッシュ……レベル15の戦士。中立・人間族。
●ザザ……レベル13の僧侶。悪・人間族。
●ディー……レベル13の女魔術師。悪・エルフ。
●マイノス……レベル12のロード。善・人間族。
●フレイ……レベル13の盗賊。中立・ホビット。
●ボルフォフ……レベル13の戦士。中立・ドワーフ。
●アルタリウス……レベル13の僧侶。善・ノーム。
●エレイン……レベル13の魔術師。善・エルフ。
●ハイランス……レベル13の侍。中立・エルフ。他のパーティを率いる。
●ベイキ女王……リルガミン王国の若き女王。
●ルケブレス……迷宮を支配する龍。〝平衡〟の守護者。

風よ。龍に届いているか

俺は横目でマイノスを睨め上げた。

しかしマイノスは俺を見ず、真っ直ぐに梯子山を見据えている。

少しやつれたが、相変わらず端正な横顔だった。だが、この男をこのアングルから見た覚えはほとんどない。

何故なら俺とマイノスは、相手が視界にいる時はほとんど正面からの睨み合いになっていたからだ。

こいつにだけは、たとえ睨み合いでも自分が逃げたなどと思われたくないと、お互いに餓鬼のような意地を張っていた。それが、今ばかりはマイノスが目を合わせるのを避けている。

何しろ、視線が絡めば常に一触即発の緊張状態となった俺たちだ。自ら折れて目をそらすマイノスの態度は、ここで諍いを起こしたくないという意図が読み取れた。

俺にしたところで、無意味な喧嘩をふっかける気はなかった。いつもなら挑発的な態度のひとつもとってしまうところだが、実のところ俺もこのリルガミンで一番気に食わない筈の男と話がしたかったのだ。

俺もマイノスに習い、乱れた水面に視線を戻した。

先刻よりもう少し強い風が、俺たちの間でひょうっと鳴った。周囲の木々がざわざわと葉を擦り合わせる。

風に、秋の匂いがした。

異変が始まって一年。温暖でありながらも四季の変化に富むリルガミンだったが、気象の異常はそれらを忘れさせるほどに激しかった。幸い市内には人々の手入れと、グルニダの杖の残留障壁のせいもあってわずかながらの緑が残っているものの、街の外に広がる平原は罅割れた荒野と化し、季節を感じさせる眺めはもはや存在していない。むしろ季節が存在しないと言っても良かった。

しかし、それは確かに秋風だった。もの寂しげな、終焉の時を間近に控えたリルガミンに相応しい風――。

五賢者の報告――神秘の宝珠を用いても天変地異を止める手立ては見い出せず、さらには近く大破壊が訪れるであろうとの最悪の予測――のおかげで、結局晩餐は主催者を欠く恰好となった。衝撃的な知らせや事件にも気丈に耐え続けたベイキ女王だったが、もはや迫り来る破滅は避けられぬと告げられ、賢者の報告も半ばで会食の席を退出してしまったのだ。

女王の計らいで食事は饗されたが、間もなく五賢者とディー、それにこのマイノスも席を外したため、広い円卓でただ俺とザザだけが飲み食いする有様だった。もっとも俺にとっては久しぶりに胃袋を満足させることができ、また気兼ねもいらない願ってもない晩餐になったのだったが。

そうして独りこの庭園に出、半時間ほど思いを巡らしていたところにマイノスが現れたのだ。

「――エレインを、仕留めてくれたそうだな」

長過ぎる間を置いて、ぎこちなくマイノスは言った。「礼を言う」

「礼？」

これには俺も少々驚いた。この男が、よりによって俺に礼とは。

「エレインは、私にとって弟のような存在だった――」

これまでに俺とは交わしたことのない柔らかい口調で、マイノスは続けた。「種族こそ違ったが、何故かやけに馬が合った。迷宮に出ない日などは、よく夜通し平穏を取り戻してからのことを語り合ったものだった」

「へえ」

ここまで聞いて、俺はマイノスが遠回しに恨み言を言いに来たんじゃないかと勘ぐった。よくも友の命を絶ってくれたな、と。

だが、マイノスは俺の疑いを込めた、いかにも退屈そうな合いの手を無視して言葉を継いだ。

「スケイルで命を救い、救われたのも一度や二度ではない。つき合いは一年余りだったが、十年来の友にも勝るかけがえのない仲間だった――」

「……」

「宝珠の探索を志願した時から、覚悟はしていたつもりだ。いつ何時仲間が、そして私自身が命を落とすことになるかも知れぬとな。もしそのまま消滅したとしても、それは仕方がないと思っていた。だが――」

ふと、マイノスは黙りこくった。

数秒後に口を開いた時、その語調は抑えてはいるが、燃え盛る炎の如き感情を内に含んでいた。

「だが、あんな化物――妖獣に生きながら食らい尽くされ、記憶さえも奪われるなどという死にかたは別だ」

マイノスが俺を見た。

俺もマイノスを見上げた。

この場で初めて、ふたりの視線がぶつかった。

「もはやエレインではないものが、エレインになりすましていたのだ。迷宮の中であいつの眼を見た時、背筋が凍りつく思いだった」

握り締めた拳が、夜目にも白く震えていた。「それが、いつもと変わらぬ声で俺の名を呼んだ。恐ろしかったよ――」

俺は無言でマイノスの瞳を見つめていた。そこにはあの妖獣に対する激しい憎悪と畏れとが浮かんでいる。

「そして、冒瀆だと、許せないと思った。この化物だけは必ず息の根を止めてやると。そうしなくては、エレインもアルタリウスも浮かばれん――」

その気持ちは、俺にもわかった。

死後も他者に――それもあんな化物に、自分の培って来た記憶を覗かれているとしたらどんな気がするだろう。また、それを利用して自分になりすまされたとしたら。

現に俺はそうなりかけたが、あの冒険者の宿での闘いを思い返すと、いまさらながら全身の皮膚が粟立ちそうだった。誰にだって、墓場にまで背負っていきたい記憶のひとつやふたつはある。

「正直なところ、私はあの時」

マイノスの瞳の中の物騒な光が、ふっと弱まった。「貴様たちが本当に冒険者の宿に向かい、妖獣の始末をつけてくれるとは思っていなかった。悪の戒律の者が、わざわざ危険を冒す訳がないと」

「へっ」

俺は唇を曲げ、薄雲のかかった月を見上げた。

「気を悪くしたのなら謝罪する。先刻の会食前の悔辱も含めて――」

「その位で臍を曲げたりはしねえ」

俺はマイノスを遮った。これ以上下手に出られると調子が狂う。「普通なら行かねえところだ。俺たちの戒律では恥でも何でもないからな。ただの気まぐれで、褒められる筋合いのことじゃねえ。それに、宿の連中は蘇生できなかったんだしよ」

俺は、大破壊の予告の後につけ加えられた犠牲者の検死報告を思い起こした。

妖獣――ゼノとは、ノームの言葉で〝誰も知らぬ者〟の意味がある――と呼ばれることになったあの化物は、他生物の肉体を細胞単位で取り込み、支配し、完全に同化する。それが焼け残った屍や、全身妖獣と化したエレインの躰を調べた末の結論だった。

通常異なる生物、と言うより同種であっても異なる個体間では、肉体の一部を繋ぎ合わせることは僧侶呪文の力を借りてもほとんど不可能に近いとされている。腕を切り落とされた男に別の男の腕はつかないのだ。

賢者が言うには、同じ人間同士でも血肉を造っている成分はそれぞれ少しずつ違うらしい。それを無理に繋げようとすると、互いに拒否反応を起こして勝手に離れるか、悪くすればどちらの細胞も死んでしまうのだそうだ。

親兄弟の間なら稀に細胞が融合する場合もあるそうだが、好んでそんな真似をする奴もいないだろう。大治や快癒などの治療呪文を用いれば、処置さえ遅過ぎなければ傷はおろか腕の一本や二本は丸々再生することも可能だからだ。

もっとも今よりも高度な魔法が駆使されていた超古代には、全く別種の生物の肉体を組み合わせる技術も存在していたという。高山地帯に棲息するキメラなどは獅子と山羊、それに竜の頭を持つ合成生物の典型であり、スケイルに巣くっている半人半馬のケンタウルスともどもその時代の悪趣味な魔法実験の落とし子であるらしい。

それにしたところで、異種族間の細胞融合は一朝一夕のうちにできはしなかっただろう。もしそうなら、この世界は今頃奇怪な合成生物に埋め尽くされていたに違いあるまい。

WIZARDRY Ⅱ

風よ。龍に届いているか

だが、あの妖獣の奴は違っていた。

賢者連はエレインの死骸からまだ死にきっていない細胞の一部を取り出して活性化させ、馬や兎、鼠などの動物や昆虫数種に植えつけて実験を行った。その結果、妖獣の細胞はあらゆるケースにおいて全く拒否反応を起こすことなく融合を開始し、同化を進行させつつ体内に妖獣本体となる〝指令体〟を造り出すことがわかったのだ。

実験動物たちは賢者の想像を遥かに越えるスピードで同化され、意識を支配された。対応が遅れれば妖獣が完全に復活するところだったが、実験場に選ばれたのは縦穴状に掘られた逃走不可能な石牢で、しかもあらかじめ油を撒いておいたためすんでのところで焼却できたそうだ。

他の生物の体内に寄生する怪物には幾つか例がある。ジガバチの巨大種であるジャイアントワスプは大型の哺乳類に卵を産みつけ、孵った幼虫がその生物を食い尽くして成長することで知られているし、死霊系の不死怪物なども本体が人の屍に潜り込んで操っているようなものだ。

しかし、それはあくまで他生物に潜っているに過ぎない。同化ではないのだ。

このように同化・融合を行う生命体は、古都リルガミンの叡智を束ねる賢者たちでさえ類を見ない代物だった。

また、〝指令体〟が抜け出した後の屍は、もはや妖獣に取り憑かれる前の肉体とは別種のものになってしまっていることも確認された。ほとんど消し炭になってはいたが、アルタリウスや近衛隊長の体細胞を調べたところ、ある程度の特徴を残しつつも妖獣の細胞組織に近いものに変質していたのだ。

これには重大な意味がある。

俺たち冒険者は日々実戦で心身を鍛え上げているため、常人とは比べものにならない生命力や運気を持っている。それ故に心臓が停止し、血の流れが止まった状態――即ち死も、多くの場合絶対ではない。

老衰や病死はともかく、刀傷や呪文などの外傷で斃れたのであれば、魔法の力で蘇生する可能性が充分にある。僧侶呪文第5レベルの復活や第7レベルの還魂によって死亡状態にある肉体を活性化させ、失われた魂を再び呼び戻すことができるのだ。

無論、失敗もある。蘇生呪文のエネルギーを吹き込まれる肉体がそれに耐え切れず、燃え尽きてしまう場合も多々あるのだ。これは術者の腕と死者の生命力のキャパシティにもよるが、運の占める要素が大きい。

そして灰からの蘇生に失敗した時、それは完全な死――消滅となるのだ。灰のかけらすら残らないのは寂しい限りだが、まあ、二度は蘇る機会があると考えれば取るに足らないことだろう。

さすがに頭部が失われたり、ゾンビ並に腐敗した者に魂を呼び戻すことはできないが、それでも俺たちは並の人間に比べて遥かに消滅しにくい。さらにリルガミン市には呪法による蘇生術に重きを置くカント寺院があり、ここは奇付と銘打った料金が高額ながら蘇生成功率もかなり高い。

だから命を落としても安心、とまではいかないものの、多少は希望をもって戦いに臨むことができた訳だ。

が、妖獣に同化された場合、蘇生は全くの不可能となってしまう。腕や脚の一部なら切り離すこともできるが、脳細胞まで変質してしまったなら、もし蘇ったとしてもそれはもはや人間ではあり得ぬ別の生物であるからだ。

外見は同じでも中身は異質な、妖獣の精神に支配された生命体――そこから再び、妖獣本体が生み出されるかも知れないのだ。

取り憑かれたが最後、二度と生き返る希望はない。それどころか、自分の記憶を食われ、あの化物に俺のふりをされる位なら消滅したほうがまだましだ。

そう考えると、妖獣はまさに最悪の怪物と言って良かった。

そして俺は、その最悪の連中と一戦交えるつもりになっているのだ。

「そんな話をしに来たんじゃねえんだろ」

薄雲がにわかに吹き散らされ、月光が庭園に降り注いだ。

その光に勇気づけられたように、マイノスは言った。

「――私はスケイルに行く。力を、貸して欲しい」

「入口がねえんだぜ。落盤でよ」

俺はマイノスに向き直った。その彫像めいた白面に、仲間を救う固い決意が見て取れる。

「転移で岩塊を越えるつもりなら、俺よりディーに頼んだほうがいいんじゃねえか。多分あいつは腹の底まで煮えくり返らせてるだろうがよ」

「彼女やザザにも改めて謝るつもりだ。しかし、転移で入口を突破するのは不確実過ぎる」

「て、ことは――」

俺は勢いよく立ち上がった。それこそが聞きたかった話なのだ。「他に迷宮への侵入口があるんだな？」

「ある」

マイノスは梯子山を見上げた。「私はそこから脱出したのだ」

「どこだ」

完治した右の指で、マイノスは指し示した。

俺は目を疑った。

その指が向けられているのは、どう見てもスケイルの山頂付近か、少なくとも中腹より遥かに上方だったのだ。

「牙の教会――貴様は良く知っているだろう」

いきなり何を言い出すのかと、俺は訝った。

牙の教会とは、迷宮第五層の一角を占める狂信者どものアジトだ。何でも得体の知れぬ邪神を崇める秘密結社で、生贄を求めるその教義故に各国で御禁制とされてきた邪教の一派であるらしい。それがいつしか迷宮に逃げ込み、そこを隠れ家としているのだ。

普通の人間なら生き残れないところだが、連中は狂信的ではあれ極めて組織だっていた。全員がレベル9以上の能力を持つ僧侶で、しかも常に集団で行動する。そして、立ちはだかる相手には――冒険者、怪物を問わず――決まれば一撃で心臓を停止させる僧侶系第五レベルの呪文・呪殺を浴びせかけるのだ。まともに戦っては、命が幾つあっても足りるものではない。

おかげである程度知性を持つ魔物は連中に手出しをせず、逆にこの牙の僧侶どもから冒険者の屍という餌をもらう、言わば飼われているような有様だった。こんな気違いどもを敵に回すのは得策ではないと、魔物なりの損得勘定が働いているのだろう。

だが何故、この教会のことをマイノスが口にするのか。

迷宮第五層には、善の者を迷宮外にテレポートする例の特殊結界が張り巡らされている筈だ。その中にある牙の教会に、善の戒律を持つマイノスが足を踏み入れられる訳がない。

が、まさか――。

「あの教会の奥に、スケイルの外壁へと通じる抜け穴がある。本来は出入り口ではなく、ごみを廃棄するためのものらしいが」

「待て。まさか結界が――」

「消えている。原因はわからん」

マイノスは俺の目を見つめ、静かに言った。「そして、知り得る限り確実な侵入口はここだけだ」

「正気か」

俺は無理矢理噴き出そうとした。「何で梯子山か知っているだろう。竜がいて、天秤ばかりのようだからだけじゃねえ。梯子でも架けなきゃ登れねえからだろうが」

結界が消えていようと、マイノスの提案は常軌を逸していた。

迷宮第五層の位置は、標高にして約九百メートル。そこに開いた廃棄口まで、ほぼ垂直に切り立った梯子山の断崖絶壁を登ろうというのだ。狂気の沙汰としか思えなかった。

しかし、向かい合うマイトスの目は本気だった。

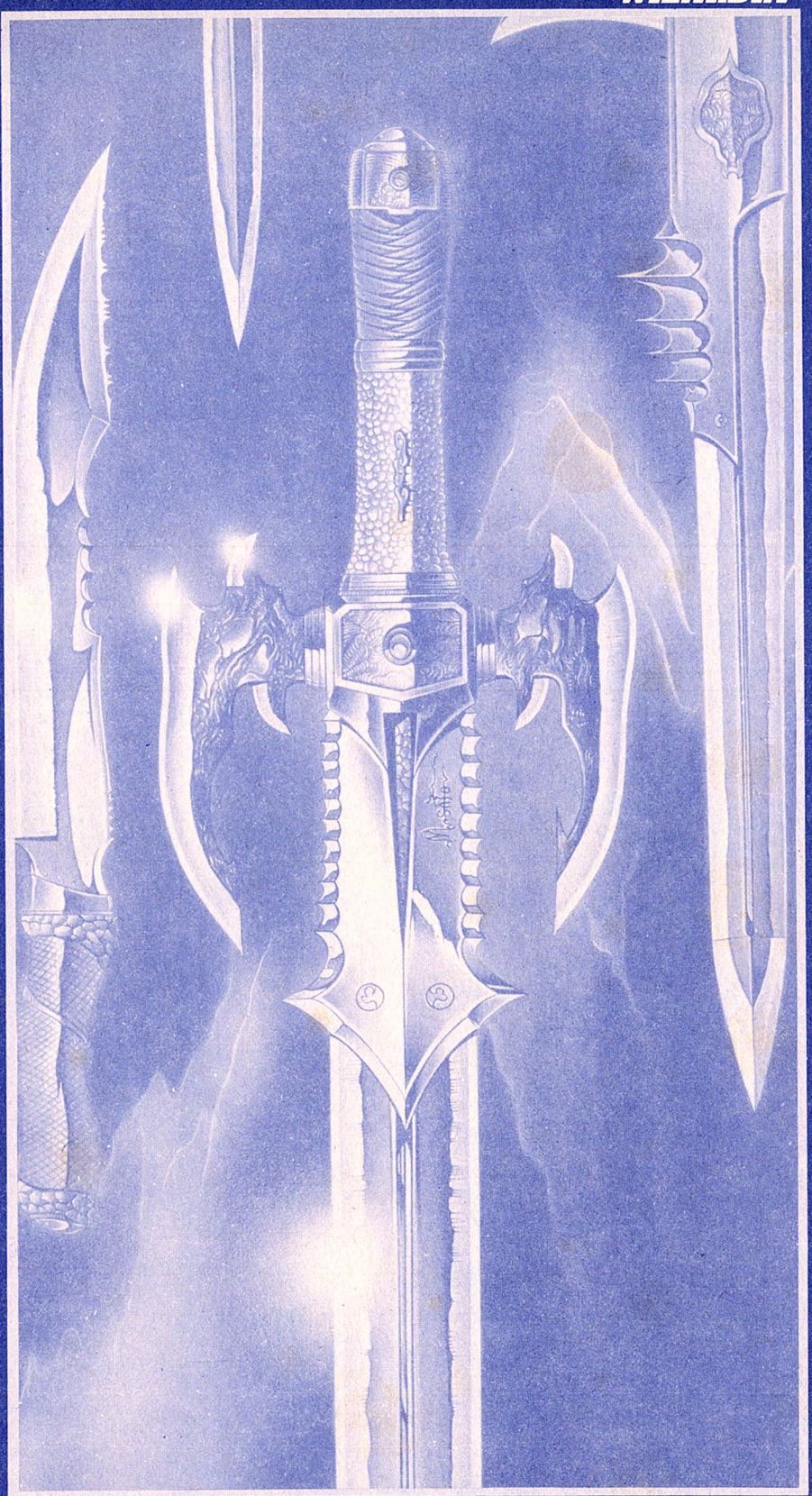
「不可能ではない」

自分に言い聞かせるようにマイノスは呟いた。「――方法はある。それには貴様の協力が必要なのだ」

（次号につづく）

ファミコン必勝本 Vol.12

とじこみスペシャル



特報!!
小説ウィザードリィ・シナリオ4「ワードナの逆襲」 手塚一郎・著
7月4日発売決定!! 予約受付中!!

●本誌Vol.2号で別冊ふろくとして登場した同小説に大幅な加筆!新たなウィズ世界に御期待ください!

▶ファンタジーランドは(P104)からお読み下さい。